

42389

教科書文庫

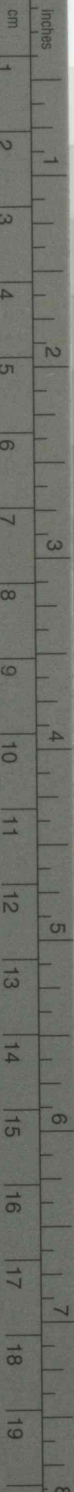
4
815
42-1939
2000 9/ 29660

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



375.9
Hal9
資料室

改新
制
新文典
女子上級用



資料室

375.9
H219

文部省檢定濟

昭和十四年一月二十六日 高等女子學校國語科用

東京帝國大學教授
文學博士 橋本進吉著

改新文典
女子上級用

東京 富山房發兌



例言

- 一 本書は昭和十二年改正の高等女學校教授要目に準據し、高等女學校第二學年又は第三學年用の國文法教科書として編じたものであります。
- 一 本書は昨年公にした女子初年級用、改制新文典に於て、口語文法の大要を説いたのを承けて、主として文語文法の概要を述べたものであります。
- 一 本書は、口語文法の知識を基礎にして文語文法に進む方針を執り、全體の組織は初年級用新文典とほぼ同一にしましたが、第一篇に於ては、各品詞について概説して、既修の知識を整理し、確實にすると共に、文語文法もその原則に於ては口語文法と同様である事を知らしめ、第二篇に於ては、品詞及び活用について口語と文語との異なる所を主として説明し、第三篇に於ては、文語の品詞の轉成と語構造の大要を説き、第四篇に於ては、文語に於ける文の成分について、口語との差異に注意しつつ述べました。文の構造及び文の種類については、初年級用新文典に於ては説き及ばなかつた爲、第五篇に於て口語と文語とを

併せてその概要を説きました。かやうにして、文語のみならず口語についても、文法組織の全體に亘つて、一通りの知識を得る事が出来るやうにしました。本書は、國語の文法組織について出来るだけ明瞭な知識と透徹した理解とを與へる爲に、幾分説明を委しくしました。それが爲、多少分量が多くなりましたが、しかし、その大半は既に口語文法に於て學んだと同様の事項でありますから、分量の割合には多くの時間を要することはなからうと思ひます。それでも猶時間の足りない場合を顧慮して、文字の大小によつて輕重を分ち、場合に應じて適宜取捨するに便しました。猶、第二篇と第四篇とは最大切な部分で、缺く事は出来ませんが、その他の諸篇殊に第三篇は、時間の都合によつては簡略にし、また、止むを得ない場合には、一部分又は全部を省いても宜しからうと思ひます。

昭和十三年十月

改制 新文典 女子上級用

目次

第一篇 品詞總説……………一

第一章 總説……………一

第二章 品詞概説(一)……………四

第三章 品詞概説(二)……………九

第二篇 文語の品詞……………一五

第四章 文語の名詞・代名詞……………一五

第五章 文語動詞の活用(一)……………一八

第六章 文語動詞の活用(二)……………二〇

目次

一

第七章 文語動詞の活用(三)……………二七

第八章 文語動詞の活用(四)……………三二

第九章 文語形容詞と形容動詞の活用……………三八

第十章 文語用言の音便形……………四三

第十一章 文語の副詞・接續詞・感動詞……………四六

第十二章 文語助動詞の種類と活用(一)……………五〇

第十三章 文語助動詞の種類と活用(二)……………五四

第十四章 文語助動詞の種類と活用(三)……………六三

第十五章 文語の助詞(一)……………六九

第十六章 文語の助詞(二)……………七七

第三篇 品詞の轉成と語の構造……………八四

第十七章 品詞の轉成……………八四

第十八章 複合語……………八七

第十九章 接頭語・接尾語……………九一

第四篇 文の成分……………九五

第二十章 文と文の成分……………九五

第二十一章 主語と述語……………九八

第二十二章 修飾語……………一〇四

第二十三章 獨立語……………一二二

第二十四章 文の成分の位置と省略……………一二七

第五篇 文の構造と文の種類……………一三一

第二十五章 文の構造と節……………一三一

第二十六章 文の種類……………一三三

目次

補充問題……………四

附表

第一表 動詞活用表

第二表 形容詞活用表

第三表 形容動詞活用表

第四表 助動詞活用表

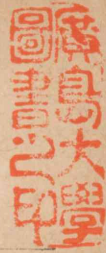
第五表 口語助動詞接續表

第六表 文語助動詞接續表

第七表 口語助詞接續表

第八表 文語助詞接續表

目次終



改訂 新文典 女子上級用

橋本進吉著

第一篇 品詞總說

第一章 總說

口語

文語

口語の文法と文語の文法と

〔一〕 わが國語には、談話に用ひる言語と、文字で書く時に用ひる特別の言語とがある。談話に用ひる言語を口語といひ、文字で書く時に用ひる特別の言語を文語といふ。

〔二〕 口語と文語とは、その文法が違つてゐる。本書では、主として文語の文法を説く。

〔三〕 庭に池がある。(口語)

山は雲に隠れたり。(文語)

第一章 總說

文語
單語

右のやうに、一つの纏まつた思想を言ひ表はす一つ々きのことばを文といひ、一つ一つの思想を表はすことばを語又は單語といふ。文は語から成立つ。

連語

〔四〕「池が」「山は」「庭に」「雲に」「隠れたり」「雲に隠れたり」のやうに、語の結合したもので、或意味を表はすが、まだ一つの纏まつた文にならないものを連語といふ。

附屬する語

獨立する語

〔五〕單語の中、庭に池がある。「山は雲に隠れたり」の「に」「が」「は」「たり」のやうに、常に他の語に附屬し、それだけ切り離しては用ひられない語を附屬する語といふ。「庭」「池」「ある」「山」「雲」「隠る」のやうに、それだけ獨立して用ひる事の出来る語を獨立する語といふ。

活用語

〔六〕「ある」「口語」「隠る」「文語」といふ語は、あらう「あります」「あれば」「隠れたり」「隠るる時」「隠るれども」のやうに、形が變る。かやうに、場合に應じて語形の變化する語を活用語といふ。その語形變化

活用

語尾

語幹

を活用といふ。語が活用する場合には、語の終の部分だけ變化するのが普通である。その變化する部分を語尾といひ、變化せぬ部分を語幹といふ。

○語によつては語幹と語尾とを區別する事が出来ないものもある(「こきくくる」
くれこよ「來」みみるみれみよ「見」など)。

〔七〕

水が流れる。(口語) 花咲く。(文語)

色がきれいだ。(口語) 松青し。(文語)

あれは川です。(口語) 日本は神國なり。(文語)

述語
主語

右の「流れる」「咲く」「きれいだ」「青し」「川です」「神國なり」のやうに、文の中で、どうするか「どんなであるか」「何であるか」を述べる(敘述する)語を述語といひ、「水が」「花」「色が」「松」「あれは」「日本は」のやうに、述語に對して、何がさうするか、何がさうであるか、又は何が何であるかを示す語を主語といふ。

修飾語

品詞

〔八〕 きれいな水が、さら／＼と流れる。(口語)

赤き花 美しく咲く。(文語)

右の「きれいな」「さら／＼と」「赤き」「美しく」は、「水」「流れる」「花」「咲く」に附いて、「どんな水か」「どんなに流れるか」「どんな花か」「どんなに咲くか」を表はしてゐる。このやうに、他の語に附いて、その意味を委しく定める事を修飾するといひ、他の語を修飾する語を修飾語といふ。

第二章 品詞概説(一)

〔九〕 語を文法上の性質によつて分類したものを品詞といふ。本書では、品詞を左の九種とする。

- 名詞 代名詞 動詞 形容詞 副詞
- 接續詞 感動詞 助動詞 助詞

名詞

數詞

代名詞

體言

動詞

〔一〇〕 「花」「鳥」「心」「春」「進歩」「東京」「楠正成」の如く、事物や地名や人名などを表はす語を名詞といふ。

○「一」「三」冊のやうに數を表はす語も、「第二」「五號」のやうに數によつて順序を表はす語も名詞である。之を特に數詞といふ事がある。

〔一一〕 「私」「彼」「これ」「そこ」「かしこ」「そなた」「どちら」の如く、人事物場所方角等の名をいふ代りに、之を直接に指していふ語を代名詞といふ。

〔一二〕 名詞代名詞は、共に活用の無い語であつて、主語になる事の出来るものである。之を總括して體言といふ。

〔一三〕 「飛ぶ」「見る」「思ふ」「有り」の如く、事物の動作存在を述べる語を動詞といふ。

動詞には活用がある。

- 飛ばない 飛びます 飛ぶ 飛べば (口語)

形容詞

〔二四〕「堅い」「涼しい」「面白し」「樂し」の如く、事物の性質有様を述べる語を形容詞といふ。

形容詞には活用がある。

堅く	堅い	堅ければ	(口語)
涼しく	涼しい	涼しければ	(口語)
面白く	面白し	面白ければ	(文語)
樂しく	樂し	樂しき者	樂しければ (文語)

〔二五〕「面白から(ウ)」「立派だ」「平かなり」「堂々たり」などは、形容詞と同じ性質の語であつて、活用がある。しかし、その活用は形容詞と同じでない。

形容動詞
用言

〔二六〕動詞・形容詞(形容動詞)は、共に活用のある語であつて、單獨で述語になる事が出来るものである。之を總稱して用言といふ。

かやうな語を形容動詞といひ、之を特別な形容詞と見る。

面白からう	面白かつた	(口語)
立派だらう	立派だつた	立派だ
立派なら	(口語)	立派な事
面白からむ	面白かりき	面白かるべし (文語)
平かなりむ	平かなり	平かなる道
平かなれども	(文語)	
堂々たらむ	堂々たり	堂々たる議論
堂々たれども	(文語)	

練習題

次の文の傍線を附けた語の品詞をいへ。

- 一 日本が風光明媚な國であるといふ事は、外國觀光客のひとしく認めるところである。(口語)
- 二 たゞその規模の小さいのは、地理地質によるもので、何ともしかたがない。(口語)
- 三 六歳になる子供は、傷ましくも大患の床に横たはつてゐた。(口語)
- 四 母親の真心こめた必死の看護も效なく、死の恐ろしい冷い手は、既にその身邊近く迫つてゐた。(口語)
- 五 枕頭の薬瓶や検温器を載せた盆の側には、人形や繪雜誌などが空しくころがつてゐる。(口語)
- 六 朝顔を植ゑたる日より芽さすを待つは、子を育つる親の心もかかやと思ひ知らる。

- 七 予は秀吉が偉人たりしと共に、また決して無學の一武邊にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。
- 八 従來かれの人物事業を世に紹介したりしは、眞書太閤記繪本太閤記などなり。
- 九 然るに、惜しいかな、これ等の書は、武人としての秀吉のみを描きて、他の方面は殆ど全く閉却したるが如し。
- 一〇 村人に道を聞けば、かなたに見ゆるは湯本の宿にして、これより箱根路となり、上り四里に下り四里、山を下ればやがて三島に至る、など、いと懇なり。

第三章 品詞概説(二)

副詞

〔一七〕「確かに」「細かに」「大層」「甚」「丁度」「きつと」「多分」「稍」「いと」「蓋し」などの如く、用言を修飾する語を副詞といふ。

副詞は、活用の無い語で、主語にならないものである。

第三章 品詞概説(二)

接續詞

〔一八〕「及び」並に「さうして」「しかし」「されば」「さるを」「しかるに」の如く、前のことばを受けて後に結び附ける語を接續詞といふ。
 接續詞は、活用の無い語で、主語にも述語にも修飾語にもならない。又他の語に修飾せられる事も無い。

感動詞

〔一九〕「あゝ」「おや」「あな」「あはれ」のやうな、感動の情を表はす語や、「はい」「いいえ」「否」「おい」「やよ」のやうな、應答や呼掛けの語を感動詞といふ。

感動詞は、活用の無い語で、それだけで言ひきりになつて、一つの文と同様なものになる事が出来るものである。主語・述語・修飾語になる事なく、又他の語に修飾せられる事もない。

〔二〇〕（一）「考へない」「歩いた」「思ふまい」「讀みけり」「勤むべし」の「ない」「た」「まい」「けり」「べし」の如く、動詞に付き、之に種々の意味を加へて敘述を助けるもの及び（二）これは花だ」「花の如しの」「だ」「如しの」如く、

助動詞

種々の語に附いて、之に敘述の意味を加へるものを助動詞といふ。

助動詞は活用のある語であつて、いつも他の語に附屬し、之と共に用ひられる。

助詞

〔二一〕「新高山は富士山より高い」「心だに誠の道に叶ひなば祈らずと」ても神や守らむの」「は」「より」「だに」「の」「に」「ば」とも「や」のやうに、他の語に附いて、その語と他の語との關係を示し、又は、之に或意味を添へる語を助詞といふ。
 助詞は、活用のない語であつて、いつも他の語に附屬し、之と共に用ひられる。

品詞と活用の有無
 品詞と附屬する語・獨立する語

〔二二〕以上の品詞の中、動詞・形容詞・用言及び助動詞には活用がある。即ち、これ等は活用語である。その他の品詞には活用が無い。
 〔二三〕品詞の中、助動詞・助詞は、附屬する語である。その他の品詞は

獨立する語である。

練習題

二

次の文の傍線を附けた語の品詞をいへ。

一 昔から松島・宮島・天橋立を日本三景と稱する。併しこの三つが果

して日本最美の風景であらうか。(口語)

二 私は日本三景以上の景色は決して少くないと思ふ。(口語)

三 勿論風景の美をはかる尺度はなく、見る人の考で定められるものである。(口語)

四 「まあ、さうでございましたか。すると疑がはれた事になりますね。

「はい、疑はしい事は少しもございません。」(口語)

五 和泉の堺に薬種を南なふ者あり。その名を長次といふ。

六 長次嘗て十津川に湯治しけるが、一日山深く分け入りて道に踏み迷へり。

七 一つの谷に下りてふと見れば、美しき籠の流れ来るなりけり。

八 あはれ、この水上には人里ありけりと喜び勇み、水に従つてのぼる。

九 日は已に暮れかゝり、鳥の音かすかに時を争ふ。

一〇 かくて十町ばかり行くに、岩を切り抜きたる門ありて、内には茅葺の家五六十軒を並べて立ちたり。

練習題

三

A 次の文の一つ一つの單語の品詞をいへ。

一 山の岨を一つ曲ると、突然私たちの足もとから幾疋かの獸が跳り出した。(口語)

二 「鐵砲さへあれば逃しはしないのだが。」(口語)

三 案内者は足を止めて、舌打ちをしながら路ばたの橡の大木を見上げた。(口語)

四 橡の枝には、二匹の子猿をつれた親猿が靜かに私たちを見下ろしてゐた。(口語)

五 參謀部の電話のベルが、けたましく鳴る。「オーイ、何か。」と、受話器

を耳にあてながら、中佐はかういつた。(口語)

六 「何、乃木少尉が戦死した。何處で。傳令中に。さあそれを將軍に申上げないわけには行くまいが。」(口語)

七 電話は切れたが、中佐は受話器を握つて、呆然と立つてゐた。(口語)

B 次の文の傍線を附けた語の品詞をいへ。

一 家々の有様を見るに、石垣には苔生ひて、竹の折戸物寂しく、蔦かづら冠木をかざる。

二 一人の老人、長次に向ひて、此處は山深く巖峙ちて、人の來べき處にあらず、また宿るべき家もなし。こなたへおはせよ、宿賃し參らせん。といふ。

三 長次強ちにその住みそめし故を問へば、あるじ眉をひそめて、われ等は浮世を遁れて隠れ住む者なり。若し強ひて之を語らば、徒に愁を催す媒ならん。といふ。

第二篇 文語の品詞

第四章 文語の名詞・代名詞

〔二四〕 名詞及び代名詞(即ち體言)は、口語と文語とで、用ひる單語に違ひがあるが、その文法上の性質は大體同様である。

〔二五〕 名詞の中、時や數を表はす語は、副詞のやうに、動詞・形容詞を修飾する事がある。

昨日地震があつた。(口語) 午前十一時東京に到着せり。

木を一本植ゑた。(口語) 大學に三年間在學せり。

〔二六〕 代名詞の中、人を指していふ語を人代名詞といひ、人以外の事物場所・方角を指していふ語を指示代名詞といふ。

〔二七〕 文語で普通用ひる代名詞は、次の通りである。

時や數を表はす名詞

人代名詞

指示代名詞

文語の代名詞

一、人代名詞

われ	わ
	汝
これ	こ
それ	そ
か	あ
かれ	かれ
た	た
れ	れ

二、指示代名詞

事物	こ、これ	そ、それ	あ、か、あ、かれ	ない、づ
場所	ここ	そこ	かしこ	いづ、く
方角	こち、あなた	そち、なた	あち、なた	いづ、か

練習題

四

次の文から名詞・代名詞をぬき出し、代名詞はその種類をいへ。

- 一 彼は山又山を越えて遠くかなたに去れり。
- 二 將軍の名は國內に傳はり、その肖像畫はいづこの店頭にも飾られ

たり。

- 三 村長に對する村民の敬愛はすこぶる厚し。されば、勤續することすでに二十餘年なり。
- 四 語る言葉もうち解けて、われはたゞへつかの防備。かれはたたへつわが武勇。
- 五 かしこに見ゆるは停車場及びその官舎なり。
- 六 そはいと名殘惜しき事なり。さらば、謝恩の印しんに何か畫がきて參らすべし。
- 七 我若し死したりと聞かば、汝必ずこれを持ち去りて、日本の役所に差出すべし。
- 八 こは思ひも寄らぬ仰かな。わが望こそかなひたれども、君の御恩は未だ報い奉らず。たゞいづかたへも御供を仕るべし。
- 九 去る七月十六日桑港を出帆せる秩父丸は、途中颱風に會ひて、豫定よりも二日遅く、昨日午後三時横濱に到着せり。

第五章 文語動詞の活用(二)

〔三〕 動詞形容詞及び形容動詞即ち用言は、口語と文語とで、文法上の差異がかなりある。

〔三六〕 文語の動詞には、口語と同じく六つの活用形がある。しかし、その名稱と用法とは、口語動詞といくらか違ふ所がある。

未然形 「ず」に連る形である。又「む(ん)」「ば」などにも連る。

打たず 讀まむ(ん) 降らば

連用形 「たり」に連る形である。また他の用言にも連り、「て」

「き」「けり」などにも連る。

打ちたり 讀み始む 降りて

終止形 言ひ切る場合に用ひる形である。終止形は用言の本體である。

文語動詞の活用形

打つ。 讀む。 降る。

連體形 體言に連る形である。

打つ人 讀む時 降る雪

已然形 「ど(ども)」に連る形である。又「ば」にも連つて、動作が既にさうなつてゐる意味に用ひる。

にさうなつてゐる意味に用ひる。

打て(ども)響かず。 今日(は)雪降ればいと寒し。

注意一 文語の已然形は口語の假定形にあたる。しかし、口語では「打てば」「降れば」等を假定の意味に用ひることが多いので、「打て」「降れ」等を假定形と名づけたのである。

注意二 文語で假定の意味は、未然形に「ば」の附いたもので表はす。
打たば響かん。 雪降らば寒からん。

命令形 命令の意を表はす爲に用ひる形である。

打て。 讀め。 降れ。

練習題 五

次の文語動詞の六つの活用形を考へて見よ。

- 知る 汲む 言ふ 勝つ 押す 急ぐ 裂く
- 有り 飛ぶ 歸る

第六章 文語動詞の活用(二)

〔三〇〕 動詞の活用の種類は、口語では五種であるが、文語では九種である。

四段活用 上一段活用 下一段活用

上二段活用 下二段活用

カ行變格活用 サ行變格活用

ナ行變格活用 ラ行變格活用

〔三一〕 四段活用

口語の四段活用動詞の大部分は、文語に於ても口語と同様に活用する。この種類の活用を、文語でも四段活用と

四段活用

文語動詞の種類

いふ。「書く」といふ動詞について見れば、次の通りである。

(文語)

(口語)

字は書かず。 (未然形) 書かない。

字を書きたり。 (連用形) 書きます。

字を書く。 (終止形) 書く。

字を書く時。 (連體形) 書く時。

字は書けども。 (已然形) 書けば。(假定形)

畫は書かず。

字を書け。 (命令形) 書け。

口語	文語	語	語尾	語幹	未然	連用	終止	連體	(文) 已然	命令
書く	書く	書	ク	カ	か	き	く	く	け	け
書く	書く	書	カ	キ	か	き	く	く	け	け

○文語四段活用 of 動詞は、カガサタハバマラの八行にある。(口語よりナ行だけ少
す)

ナ行變格活用

〔三〕 ナ行變格活用 口語四段活用 of 動詞の中、死ぬは文語では次
のやうに活用する。

(文語)

死なず。

(未然形)

死なない。

知れる人死にたり。

(連用形)

死にます。

人は一度は死ぬ。

(終止形)

死ぬ。

死ぬる時。

(連體形)

死ぬ時。

身は死ぬれども

(已然形)

死ぬば。(假定形)

名は朽ちず。

國の爲に死ぬ。

(命令形)

死ぬ。

(口語)

口語	文語	語	未然	連用	終止	連體	(文)已然	命令
死ぬ	死ぬ	死い	な	に	ぬ	ぬる	(口)假定	ね
			な	に	ぬ	ぬる	ね	ね

右のやうに、文語の「死ぬ」は、な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ねと變化する。この
やうな活用をナ行變格活用(略稱ナ變)といふ。

ナ變に屬する動詞は、「死ぬ」「往ぬ」の二語である。

○「死ぬ」は現代文では、ナ行四段活用にも用ひる。「往ぬ」は今あまり用ひない。

ラ行變格活用

〔三〕 ラ行變格活用 口語の四段活用動詞の中、「有る」は、文語では次
のやうに活用する。

(文語)

國に功有らむ。

(未然形)

有らう。

功有りき。

(連用形)

有ります。

(口語)

功有り。 (終止形) 有る。

功有る人。 (連體形) 有る人。

功有れども (已然形) 有れば (假定形)

誇らず。

國に功有れ。 (命令形) 有れ。

口語	文語	語	有る	有 ^あ	未然	連用	終止	連體	(文)已然	命令
					ら	り	り	る	る	れ
有る	有り				ら	り	る	る	れ	れ

右のやうに、文語では終止形が「あり」となる。このやうな活用を「**ラ行變格活用略稱ラ變**」といふ。

○終止形がイ段の音で終るのは、動詞ではラ變の外に例がない。ラ變に屬する動詞は、「有り」「居り」「侍り」である。

下一段活用

〔語〕

下一段活用

○「居り」は現代文ではラ行四段活用にも用ひる。「侍り」は今あまり用ひない。

文章では、その活用は口語力行下一段の動詞と殆ど同一である。之を文語の**下一段活用**といふ。

(文語)	鞠はけず。	(未然形)	けらない。
	鞠をけたり。	(連用形)	けります。
	鞠をける。	(終止形)	ける。
	鞠をける時。	(連體形)	ける時。
	鞠はけれども	(已然形)	ければ (假定形)
	巧ならず。		
	この鞠をけよ。	(命令形)	けれ。

口語	文語	語	未然	連用	終止	連體	(文)已然	命令
蹴る	蹴る		け [○]	け [○]	ける	ける	(口)假定	けよ [○]
			け [○] ら	け [○] り	ける	ける		け [○] れ
					ける	ける		け [○] れ

○文語下一段の命令形には口語下一段で用ひる「ける」の形は用ひない
 文語下一段活用に屬する動詞は「蹴る」だけである。

○蹴るは用言に連る場合だけは口語でも「けたふす」「けつまづく」など「け」を用ひる
 のが普通である。

練習題

六

次の文語動詞の活用のしかたを示せ。

- 泣く 嗅ぐ 借る 貸す 待つ 縫ふ
- 呼ぶ 往ぬ 散る 散らす 抜く 足る
- 在り 折る 居り 編む 飽く

上一段活用

第七章 文語動詞の活用(三)

【三】 上一段活用 口語上一段活用の動詞の中例へば「着る」は文語
 では左の如く活用し、口語と殆ど同一である。かやうな活用を
 文語の上一段活用といふ。

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| (文語) | (口語) |
| 衣は未だき ^ず 。 | き ^{ない} 。 |
| 衣をき ^{たり} 。 | き ^{ます} 。 |
| 衣をき ^る 。 | き ^る 。 |
| 衣をき ^{る時} 。 | き ^{る時} 。 |
| 衣をき ^{れども} 。 | き ^{れば} (假定形) |
| 猶寒 ^し 。 | |
| 衣をき ^よ 。 | き ^よ (命令形) |

口語	文語	語	未然	連用	終止	連體	(文)已然 (口)假定	命令
着る	着る		き	き	きる	きる	きれ	きよ
			き	き	きる	きる	きれ	きよ
								きよ

即ち、口語の命令形の「きよ」だけは、文語に用ひない。

○文語上一段活用の動詞は、カ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワの各行にある。

○文語上一段活用に屬する動詞は「着る」「似る」「煮る」「干る」「見る」「射る」「鑄る」「居る」「奉る」などである。

○文語上一段動詞は、殆ど皆語幹と語尾の區別が無い。

上二段活用

〔三〕

上二段活用 口語上一段活用の動詞の中、文語で上一段に活用するものの外は、大概之と違つた活用になる。例へば「起きる」の文語の活用は、次の通りである。

(文語)

未だ起きず。

(未然形)

起きない。

(口語)

朝早く起きたり。

(連用形)

起きます。

六時に起く。

(終止形)

起きる。

朝起くる時。

(連體形)

起きる時。

毎朝五時に起くれども、

(已然形)

起きれば (假定形)

猶間に合はぬ事あり。

早く起きよ。

(命令形)

起きよ (起きろ)

口語	文語	語	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然 (口)假定	命令
起さる	起く		起		き	き	きる	くる	きれ	きよ
					き	き	きる	くる	きれ	きよ
										きよ

右のやうに、文語の活用の語尾はきく即ち五十音圖のイウ二段の音と、それに「れよ」の附いたものである。かやうな活用を上二段活用といふ。

下二段活用

○上二段活用の動詞は、カガクダハ・バ・マヤ・ラの各行にある。
○ヤ行上二段活用の動詞は「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」の三語である。

〔毛〕 下二段活用 口語下一段活用の動詞は、文語では大概違つた活用になる。たとへば「受ける」の文語の活用は、次の通りである。

(文語)

(口語)

未だ試験を受けず。	(未然形)	受けない。
試験を受けたり。	(連用形)	受けます。
試験を受く。	(終止形)	受ける。
試験を受くる時。	(連體形)	受ける時。
試験を受くれども	(已然形)	受ければ。(假定形)
合格せず。		
早く試験を受けよ。(命令形)		受けよ(受けろ)

口語	文語	語	語幹	語尾
受ける	受く	受		
け	け	未然		
け	け	連用		
ける	く	終止		
ける	くる	連體		
けれ	くれ	文已然 (口假定)		
けるよ	けよ	命令		

右のやうに、文語の活用の語尾は、けく、即ち五十音圖のエ・ウ二段の音と、それになるれよの附いたものである。かやうな活用を下二段活用といふ。

○下二段活用の動詞は、五十音圖の各行と、ガサ・ダ・バの各行とにある。
○ア行下二段活用の動詞は「得」「心得」だけであり、ワ行下二段活用の動詞は「植う」「飢う」「据う」の三語だけである。

○文語に、下一段活用の動詞「蹴る」があるが、それは口語では普通ラ行四段に活用する。

練習問題 七

A 次の文語動詞の活用のしかたを示せ。

B 次の漢字を口語と文語との動詞に用ひて、その活用のしかたを比べて見よ。

悔 <small>く</small>	老 <small>お</small>	越 <small>こ</small>	報 <small>は</small>	過 <small>す</small>
堪 <small>た</small>	据 <small>す</small>	枯 <small>か</small>	懲 <small>こ</small>	恥 <small>づ</small>
	殖 <small>し</small>	る	る	づ
	換 <small>か</small>	飢 <small>う</small>	恨 <small>む</small>	強 <small>ふ</small>
	下 <small>くだ</small>	落 <small>お</small>	混 <small>ま</small>	尋 <small>ぬ</small>
	怖 <small>おそ</small>	つ	す	ぬ
	生 <small>は</small>	撫 <small>な</small>	周 <small>あ</small>	植 <small>う</small>
	絶 <small>た</small>	づ	章 <small>わ</small>	う
	並 <small>なら</small>	吠 <small>わ</small>	つ	逃 <small>ぐ</small>
	合 <small>あ</small>	考 <small>か</small>	教 <small>ふ</small>	逃 <small>ぐ</small>
	觸 <small>ふ</small>	ふ	求 <small>む</small>	任 <small>ま</small>
	攀 <small>よ</small>		む	す

第八章 文語動詞の活用(四)

カ行變格活用

〔三〕カ行變格活用 口語カ變の動詞「來る」は、文語では次のやうに活用する。

(文語) 人もこず。 (未然形) こない。

人きたり。 (連用形) きます。

人く。 (終止形) くる。

くる人なし。 (連體形) くる時。

春くれども (已然形) くれば (假定形)

花咲かず。

とくこよ。 (命令形) こい。

口語	文語	語	未然	連用	終止	連體	(文)已然	命令
來 <small>く</small>	來 <small>く</small>	來 <small>く</small>	こ	き	く	くる	(口)假定	こよ
來 <small>くる</small>	來 <small>くる</small>	來 <small>くる</small>	こ	き	くる	くる		こい
					くる	くる		
					くる	くる		
					くれ	くれ		
					くれ	くれ		
					こい	こい		

このやうな活用を、文語でもカ行變格活用(略稱カ變)といふ。その終止形と命令形とに於て口語と違ひがある。

○カ變に活用する文語動詞は「來」だけである。

〔三九〕 サ行變格活用 口語サ變の動詞「爲る」は、文語では次の如く活用する。

(文語)

仕事もせず。
熱心に仕事をしたり。
仕事をす。
仕事をす時
熱心に仕事をすれども
功擧らず。
仕事をせよ。

(未然形) しない(せぬ)。
(連用形) します。
(終止形) する。
(連體形) する時
(已然形) すれば。(假定形)
(命令形) せよ(しろ)。

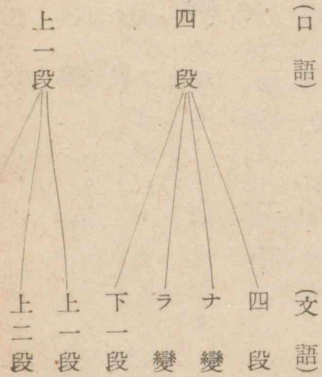
口語	文語	語	未然	連用	終止	連體	文已然 (口假定)	命令
爲る	爲す		し○せ	し	す○	する	すれ	せよ
					する○	する	すれ	せよ
							すれ	せよ
							すれ	せよ
							すれ	せよ
							すれ	せよ
							すれ	せよ
							すれ	せよ
							すれ	せよ

口語動詞と文語動詞との異同

このやうな活用を、文語でもサ行變格活用(略稱サ變)といふ。その終止形が口語と違ひ、又口語の未然形命令形の中、「し」「しろ」は文語には用ひない。

○サ變に活用する文語動詞は「爲」だけである。しかし、名詞や漢語等を動詞にするには、サ變にするのが普通であり、その際「サ」行になるものもある。
罪す 勉強す 製す 論す ストップす 煎す。

〔四〇〕 以上に述べた、口語動詞と文語動詞との活用の種類を對照して示せば、次の通りである。





練習問題

八

- A 次の文語動詞の活用のかたを示せ。
- 與^よす 輕^{かろ}んす 命^{いのち}す 理^り解^{かい}す 來^き 安^{やす}んす 案^{あん}す 譯^{やく}す
- B 傍線をつけた動詞の活用の種類を考へよ。
- 社前より下を望めば、美しく彩色したる土佐繪に向ふ趣あり。
 - 壁の如く立ちたる岩の面を垂れたる鎖傳ひつゝ攀ち登る。
 - 茶屋に歸りて預け置きたる傘外套など受け取り、これより主峰を指して右の方に入る。
 - 刈り果てたる田つらには下りゐる鳥さへ見えて、豊かなる秋の煙満ちわたる。
 - 左に折れて池畔を過ぎ、又右に曲りて廣場に出づれば、中央に立て

るは將軍の銅像なり。

- 常世は、ちぎれたる具足を着け、さびたる長刀を横たへ、わるびれたる様もなく、進みて御前にかしこまる。
- 降り積れる雪も跡なく消えて、山河草木喜びにあふるる春は來ぬ。

C 次の文に誤があつたら正せ。

- 水を買^かり、などいふは思^{おも}ひもよらぬ事なり。
- 若^{わか}き時學^{まな}ばずば老^{おい}ひて悔^くむる時あるべし。
- 國家の榮^{さか}へん事を願^{ねが}ひて、絶^たへず産業を奨^あげしめり。
- 自ら深くその誤^{あやま}りを恥^はじて、再び人に教^{おし}ゆるを欲^ほせず。
- 輝元大軍を率^らひ來^きりて、宗治を救^{たす}はんとせしが、秀吉に敵^たすべからざるを察^さして、和^わを請^こふ。
- 鹿^か追^おひ獵^り師^しは山を見ず、飢^うへたる者は食^くを擇^{えら}ばず。
- 敵^たく攻^せ寄^りすとも、城門を閉^とじて、決^けして出^でることなかれ。

ラ行三連用

第九章 文語形容詞と形容動詞の活用

文語形容詞の活用形

〔四〕 口語の形容詞の活用形は四つであるが、文語の形容詞には五つの活用形がある。

未然形 「ば」に連つて、假定の意味を表はす形である。

價高くば買ふまじ。 新しくば買はん。

注意 口語形容詞には、未然形なく、假定の意味を表はすには假定形を用ひる。

連用形 動詞に連る時の形である。又口語「ても」の意味の「と

も」に連る。

價高くなる。 新しくとも買ふまじ。

終止形 言ひ切るのに用ひる形である。

終止形は形容詞の本體である。

價高し。 品新し。

連體形 體言に連る形である。

高き價。 新しき品。

已然形 「ども」に連る形で、又「ば」にも連る。さうして「已」にさ

うである意を表はす。

價高けれどども買ふべし。 新しければ買ひたり。

注意 文語の已然形は、口語の假定形と同じ形である。

〔四〕 形容詞の活用は、口語では一種であるが、文語では二種になる。

ク活用 口語の「高い」は、文語では次の様に活用する。

口語	文語	語	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然	命令
高い	高し		高	か	く。	く	し。	き。	けれ	
					く	く	い。	い。	けれ	

このやうに、語尾がく・くし・き・けれと變るものを文語のク活用と

文語形容詞の活用ク活用

辣言類

九

「と」で終る副詞「洋々と」「泰然と」などから出たものである

次の文から形容詞・形容動詞を抜き出し、その活用をいへ。

- 一 大國主命は恭しく國土を天照大神に奉りぬ。大神その真心の厚きを賞して、命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。
- 二 縦は柔かにして工作に便なれば、箱類を作るに用ひられ、梅は堅くして久しきに耐ふるが故に、家屋の土臺となすに宜し。
- 三 波靜かなる島のあたり、高く低く群飛ぶかもめは、落花の風にひるがへるに似たり。
- 四 近頃は容態殊に悪しく候へば、命の限りも遠からじと、一同あきらめ居り候。
- 五 堂々たる風采と朗々たる音聲とは、まづ聽衆の心を動かしたり。
- 六 いかなる所にも樂しき地はあるべく、またいかなる所にも樂しからざる地はあるべし。

- 七 諺に「始よければ終よし」ともいひ、また「始あしければ後よし」ともいふ。
- 八 われ等は、この狭小なる國土に安逸を希ふ事なく、進んで地廣く、人口稀なる處に伸展せざるべからず。

第十章 文語用言の音便形

〔望〕 文語の用言にも口語と同様に音便形がある。その中、動詞の音便形は、主として、四段ナ變う變の動詞が、助詞「て」に連る時に現はれる。その形及び種類は口語のと同じである。

○音便形は、他の語尾から轉じて出來たものである。口語には音便形を用ひる場合には、いつも之を用ひるが文語には、もとの形と音便形とをどちらも用ひる。

- 一 語尾がイとなるもの(イ音便形) 力行四段のキ、ガ行四段のギから。(但しガ行の時「ては」「で」となる。)

聞いて(聞きて) 塞いで(塞ぎて)

二 語尾がウとなるもの(ウ音便形) ハ行四段のヒから
言うて(言ひて) 請うて(請ひて)

三 語尾がンとなるもの(撥音便形) バ行四段のビ、マ行四段
のミ、ナ變のニから。(「ては」で「となる」)

四 語尾が促音となるもの(促音便形) タ行四段のチ、ハ行四
段のヒ、ラ行四段のリ、ラ變のリから。

勝つて(勝ちて) 養つて(養ひて) 刈つて(刈りて)
有つて(有りて)

○以上の外、サ行四段の語尾シがイになる事がある。

燒栗致(いて候。二十四差(いたる切斑の箭)

文語形容詞の
音便形

〔四六〕

文語形容詞の音便形は、主として連用形が他の用言に連る時

又は連體形が助詞、かなに連る時に現はれる。ウ音便形とい
音便形とがある。

日も高(う)高(く)なりぬ。 雨烈(し)う烈(しく)ふる。
よ(い)よ(き)かな。 悲(し)い悲(し)きかな。

練習問題

一〇

A 次の文から音便形を抜き出し、その原の形をいへ。

- 一 夜ふけに及(ひ)んで松明(たきまろ)の光おびた(し)う見ゆ(みゆ)。
- 二 清正は片鎌槍(かたかまやり)をしごいて突(き)いてかゝる。
- 三 道に迷(ま)うて小川に出(い)で流れに沿(ま)うて下れば、一寒村に出(い)づ。
- 四 こはいかに降(ふ)つて湧(も)いたる敵(た)の大軍(たいぐん)。
- 五 人に長(なが)たるも、またかたい(き)かな。

B 次の文に誤があつたら正せ。

- 一 仰(た)いで天(あま)の高(たか)きを見る。

- 二 勇むで家を出でたり。
- 三 重荷を負ふて坂を登る。
- 四 鹿毛なる馬に黒鞍置るて乗つたりけり。
- 五 言うてかひ無き事をなげくは愚なり。
- 六 飛むで火に入る夏の蟲。
- 七 人を疑う前にまづ自己を省みよ。

第十一章 文語の副詞・接續詞・感動詞

〔甲〕 副詞・接續詞及び感動詞は、口語と文語とで、用ひる單語には違ひがあるが、その文法上の性質は大體同様である。

〔乙〕 副詞の中、程度を表はすものは、用言を修飾するばかりでなく、

- (甲) 他^の副詞^{又は}乙^{或種}の體言^を修飾^{する}事^{がある}。
- (甲) 非常^に見^事に^着陸^{した}。(口語)
- いと^かす^かに^見ゆ。

程度を表はす副詞

(乙) わづか五分の違ひだつた。(口語)

やゝ右を見よ。

この大發明は唯二人の協力によつて成し遂げられたり。副詞には、之を受ける用言に、一定の言ひ方を要求するものがある。

一定の言ひ方を要求する副詞

それは恐らく事實でせう。(口語)

決して忘れません。(口語)

たとひ誰が何と言つても、あの人は聞くまい。(口語)

汝須らく史書を讀むべし。

われ豈辯を好まんや。

よも知らじ。

をさく劣るまじ。

砲聲は恰も百雷の一時に落つるが如し。

文語の接續詞

〔五〕

接續詞として文語に用ひられる語は、大體次の通りである。

並に 及び 又 且
さらば されば かくて 因つて 随つて

或は 又は 若しくは
但し 尤も されど さはれ 然れども 然るに

〔五〕

感動詞として文語に用ひられる語は、大體次の通りである。

ああ あはれ あな あはや
いざ いで や やよ すは いか
いな おう

文語の感動詞

練習題

二

次の文から副詞・接續詞・感動詞を抜き出せ。副詞は何を修飾するかを示せ。

一 城の前面は直ちに村落に臨みて、山高からず坂もさまで峻しから

す。谷亦深しといふべからず。

二

山上の廣さは僅かに數百歩に過ぎずして、眞にこれ彈丸黒子の孤

三

すは伏兵のありけるぞ。汝等速かに之を撃ち拂ふべし。

四

彼の私財は既に盡きたり。しかもこの救濟事業は中止すべきに

五

あらず。よつて普く世人に訴へて、寄附を募らんとせり。

六

事實は全く汝の言の如し。然れども如何に之を處理すべきかは、

七

未だ何人も考へ得ず。

八

や、辨慶よも忘れはすまじ、去年の今日を。

九

なほも勇敢に進まんか、はた斷念して退くべきか、予は暫し惑はざ

一〇

るを得ざりき。

敵は不意の攻撃に恐れてはるか後方に退却せり。

若し幸に神の助あらば、生きて還るべし。

文語助動詞の種類

第十二章 文語助動詞の種類と活用(一)

〔五〕 文語の助動詞は、口語助動詞よりも一種多く、すべて十種に分れる。

受身 可能 使役 打消 過去及び完了 推量
希望 敬讓 指定 比況

○口語には比況の助動詞はない。

〔五〕 文語の助動詞にも活用がある。その活用のしかたは、文語の動詞と同じものと、形容詞と同じものと(共に、或活用形の缺けたものがある)、特殊なものがある。他に、語形の變化せぬものもある。

〔五〕 受身の助動詞 **る** **らる**

人に笑はる。 主人に譽めらる。

受身の助動詞

文語助動詞の活用

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	れ	れ	る	る	る	れよ
らる	られ	られ	らる	らる	らる	られよ

下二段活用
下二段活用

○受身の「る」「らる」に當る口語は「れる」「られる」である。

「る」は、四段・ナ變・ラ變の動詞の未然形に付き、「らる」は、その外の活用の未然形に附く。

○サ變の動詞に附いて「罪せらる」「侮辱せらる」となるのを現代の文語では「罪さる」「侮辱さる」ともいふ。

〔五〕 可能の助動詞 **る** **らる**

一日に十里は歩まる。 何時にても見らる。

○可能の「る」「らる」に當る口語は「れる」「られる」である。

「る」「らる」の活用のしかたは、受身の「る」「らる」と同じである。但しこれには、命令形がない。

可能の助動詞

使役の助動詞

○「る」「らる」の動詞への付き方は、受身の「る」「らる」と同じである。○「讀む」能は「す」「讀み」得たりなどは動詞が附いて可能の意を表はしたのである。

〔五〕

使役の助動詞 す さす しむ

弟に苗木を買はす。 苗木を庭に植ゑさす。
苗木を鉢に移さしむ。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

下二段活用
下二段活用
下二段活用

○使役の「す」「さす」に當る口語は「せる」「させる」である。「しむ」も之と同様の場合に用ひる。

「す」は、四段・ナ變・ラ變の動詞の未然形に付き、「さす」は、その外の活用の未然形に附く。「しむ」は、すべての動詞の未然形に附く。

打消の助動詞

〔五〕

打消の助動詞 ず ざり

花は未だ咲かず。
群衆は既に散じて一人も見えざりき。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
ざり	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ	ざれ

特殊活用
ラ變

○「ず」に當る口語は「ぬ」「ん」である。口語では又「ない」も用ひる。「ざり」は、口語ない又は「ぬ」の場合の外にまた「なから」「ウ」「なかつ」「タ」の場合に用ひる。

「ず」「ざり」は動詞及び形容動詞の未然形に附く。

練習問題

一一

傍線を附けた助動詞の種類と、その活用のしかたとを述べよ。

第十二章

文語助動詞の種類と活用(一)

- 一 彼の眺め入りしは繪にあらす、團扇に用ひられたる竹なりしなり。
- 二 今日文明の利器と稱せらるるものにして、エヂソンの天才によらざるもの殆どなしといふ。
- 三 たゆまず千里の道も行かるべし。
- 四 毛生ひたる厭はしき蟲にも松蟲といふがありて、松を枯死せしめ、人に疎まる。
- 五 かねての本望を遂げさせんとて、終に出家せしめたり。
- 六 後は群山にさへぎられて見えざれども、前は際涯なき平野なり。
- 七 避けらるべき禍を避けんとする意なきものは、得らるべき機会をも失ふ者なり。

第十三章 文語助動詞の種類と活用(二)

〔天〕 過去及び完了の助動詞 き けり〔以上、過去〕 ぬ つ たり
り〔以上、完了〕

過去及び完了の助動詞

昔支那に吳越といふ二國ありき。
昔一人の男ありけり。
庭の梅もはや散りぬ。
とかくして今日も暮しつ。
門前に國旗を掲げたり。
四月より級長となれり。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
き			き	し	しか	
けり	(けら)	に	けり	ける	けれ	
ぬ	な		ぬ	ぬる	ぬれ	(ぬ)
つ	て	て	つ	つる	つれ	(てよ)
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	(たれ)
り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	(れ)

特殊活用
ラ變
ナ變
下二段活用
ラ變
ラ變

○口語には過去にも完了にも「た」を用ひるが文語では過去の助動詞と完了の助動詞とは大體分れてゐる。

○口語の「た」に相當する文語助動詞は「たり」であるが、口語の「た」は、また文語の「き」「けり」「ぬ」「つ」「り」にあたる場合にも用ひる。

○「ぬ」「つ」はまた口語で「しまふ」或は「しまつた」の意味にも用ひ「たり」「り」は口語で「ある」「である」の意味にも用ひる。

散りにし花散つてしまつた花

いづこに行きつらん(行つてしまつたらう)

壁に掛けたる繪(掛けてある繪)

時計は絶えず時を刻めり(刻んでゐる)

「き」「けり」「ぬ」「つ」「たり」は、動詞の連用形に附く。「き」「けり」は形容動詞の連用形にも附く。但し「き」「ぬ」には、次の例外がある。

一、「き」の終止形は、カ變の動詞には全く附かず、連體形・已然形は、その未然形にも附く。又「き」の連體形・已然形は、サ變

の動詞の連用形には附かず、その未然形に附く。

こ	し	し	き	し
し	か	し	か	し
せ	し	か	し	き
し	か	し	き	し

二、「ぬ」は、通例ナ變の動詞には附かない。

○「ぬ」「つ」の未然形「な」「て」は普通助動詞「む」助詞「ば」に連り、連用形に「て」は助動詞「き」「けり」に連る。

散りなむ。	散りなば。	散りにき。	散りにけり。
取りてむ。	取りてば。	取りてき。	取りてけり。

「り」は四段活用動詞の已然形と、サ變動詞の未然形にだけ附く。

われ等は全力を盡せり。

われ等は最後まで、努力せり。

〔五〕 推量の助動詞 らし むん むずんず らむらん
けむけん) べし まじ じ まし めり

彼處にも雪は降るらし。

麓には旅店もあらむ。

敵攻め寄せむず。

雲のいづくに月宿るらむ。

昔の友はいづち行きけむ。

演習に参加する軍艦は百艘を超ゆべし。

彼の勇武は如何なる者にも劣るまじ。

喜の來らむ日も遠からじ。

早く知らましかば、かゝる不覺はなからまし。

はや夜も明くめり。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
らし			らし	(らし)	(らし)	
む			む(ん)	む(ん)	め	
むず			むず(んず)	むずる(んずる)	むずれ(んずれ)	
らむ			らむ(らん)	らむ(らん)	らめ	
けむ			けむ(けん)	けむ(けん)	けめ	
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	
じ			じ	(じ)	(じ)	
まし	(ませ)		まし	まし	ましか	
めり		(めり)	めり	める	めれ	

變化せず
四段活用
サ變
四段活用
四段活用
ク活用
シク活用
變化せず
特殊活用
ラ變

○「らし」に當る口語は「らしし」、「む」に當る口語は「う」、「よう」、「まじ」に當る口語は「まい」である。「らむ」は口語「だらう」又は「であらう」の意味に「けむ」は口語「ただらう」又は「た

であらうの意味に「じ」は「まい」又は「ないだらう」の意味に用ひる。

○「むず」「べし」「まし」「めり」にあたる助動詞は口語にない。その中、「むず」は口語「う」「よう」の意味に、「べし」は推量「だらう」「可能」ことが出来る、「義務」なければならぬ「命令」(なさい)などの意味に用ひ、「まし」は實際さうでない事を假に想定する場合又は「う」「よう」の意味に用ひ、「めり」は様子だと大體推量していふ意味に用ひる。

「らし」「らむ」「へし」「まじ」「めり」は、動詞の終止形に附く。但し、ラ變の動詞及び形容動詞には、連體形に附く。「あるらし」「あるらむ」「あるべし」「あるまじ」など)

「むじ」「むず」「まし」は、動詞及び形容動詞の未然形に附く。

「けむ」は、動詞及び形容動詞の連用形に附く。

○「む」「むず」「らむ」「けむ」は發音のまゝに「ん」「んず」「らん」「けん」とも書く。

○「べし」「まじ」の連用形「べく」「まじく」が動詞「あり」と合體して出來た「べかり」「まじかり」がある。第一種形容動詞と同様に活用する。

木を折るべからず。

〔六〕

希望の助動詞 たし まほし

人には言ふまじかりけり。

早く家に歸りたし。 一人行かまほし。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	

ク活用

シク活用

○「たし」に當る口語は「たい」である。口語「たがる」に當る文語助動詞はない。

「たし」は動詞の連用形に附き、「まほし」は未然形に附く。

○「たし」「まほし」の連用形「たく」「まほしく」が動詞「あり」と合體して一語となつた「たかり」「まほしかり」がある。第一種形容動詞と同様に活用する。

逢ひたかりき。

さほど見まほしからず。

練習題

一三

傍線を附けた助動詞の種類と活用のしかたとを述べよ。

- 一 たのしみは朝起き出でて昨日まで無かりし花の咲ける見る時。
- 二 その人の御名は聞かざりしかども、荷物のさげ札に、市の字ありしを見覚えたり。
- 三 右に見ゆるは山にはあらじ、雲ならんと云ふ者もありき。
- 四 何故に國を去らんとまで思ひ立ちけんとかやしく候。
- 五 足らぬ事なき身には成りけれども、なほ貧しき昔を忘れざりき。
- 六 汝かの地に行かば、必ずや人に怪しまれて、或は命も危かるべし。
- 七 この分ならば別條あるまじく存じ候に付、御安心下されたく候。
- 八 義時しばく、上皇の仰にそむきしかば、上皇大いにいきどほり給ひ、國々の武士を召して、義時を討たしめ給ひき。
- 九 少將さしも頼もしう思ひつる宰相殿には離れ給ひぬ。心の中、こそは便り無かりけめ。
- 一〇 其處には兵六七千騎もあるらんとぞ見えし。

- 一一 山里に散りなましかば、櫻花匂ふさかりも知られざらまし。
- 一二 めでたく見えさせ給ふ御有様、千歳を経とも飽く世あるまじかん(まじかる)めり。
- 一三 若しこの事漏れぬることならば、行綱(人名)先に失はれなんす。

第十四章 文語助動詞の種類と活用(三)

〔六〕 敬讓の助動詞 する する する する

主人は毎日五時に歸らる。
 先生は朝六時に起きらる。
 殿下も會に臨ませらる。
 殿下は快く之を受けさせ給ふ。

陛下親しく閱兵せしめ給ふ。
 〇敬讓の「る」に當る口語は「れる」「られる」である。口語ますに相當する文語助

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき		

ク活用

○口語には比況の助動詞がない。文語「ごとし」の意味を「やうだ」で表はす。

「ごとし」は、動詞の連體形、又は之に助詞「が」の附いたもの、又は體言に助詞「の」の附いたものに附く。

○「ごとく」は、「にて」「にして」及び「なり」を附けて用ひる事がある。

顔容婦女の如くにて。(にして)而も心は鐵石の如くなり。

練習題

一四

A 傍線を附けた助動詞の種類とその活用のしかたとを述べよ。

- 一 天顏殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。
- 二 學生たるものは、すべて某の如くありたきものなり。
- 三 陶山義高等皇居に火を放ち奉れば、後醍醐天皇は終に笠置を出でさせ給ふ。

四 人々もはじめ一二町が程は、主上を扶けまゐらせて、前後に御供申されけり。

五 雨の降るかと思召して、木蔭に立寄りさせ給へば、木の下露のはららと御袖にかゝるなりけり。

B 次の文から助動詞を抜き出し、その活用のしかたを示せ。

- 一 殿も之を御形見に御覽ぜまほしくて、いたく惜しませ給ひけり。
- 二 佛前には五十餘歳の旅商人ありて、さめくと泣きゐたり。
- 三 うちつけにその故を問ふべきにあらねば、われも立去りて元の驛路に出でぬ。
- 四 麓に松林に包まれて立てる神社あり。里人に問へば八幡宮なりといふ。
- 五 かの建御雷神が大國主命と會見せられしは、此處なるべしといふ。
- 六 そのかみ此處にいかめしく向ひあひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如し。

七 明治神宮の御造營には、各地より御手傳を願ひ出づる者多かりしかば、何れも十日間を限りて土木に従事せしめたるに、通常の人夫にもほざりて、仕事ははかどりたりと聞く。これも真心の致す所なるべし。

C 次の文から助動詞を抜き出し、その用法を説明せよ。

- 一 涼風に袂を拂はせつゝ橋上に立てば、河鹿の音もかすかに聞取られたり。
- 二 柳に繫がれたる馬のいなゝく様などげに田舎ならでは見らるまじき景色なり。
- 三 水を入れたる器に孔をあけんに、たとひ流るゝこと少くとも、絶え間なく漏りゆかば、やがて水は盡きぬべし。
- 四 何事もせざるうちに、はや三年は過ぎにけり。
- 五 曾呂利新左衛門、或時太閤に對ひ、願はくは一日御耳の香を嗅がせられたし、といふ。

- 六 太閤「こやつ又何をかなすらん」と疑はれしが、宜し、汝がよきに嗅ぐべし」と許されたり。
- 七 諸大名は、讒言せらるゝにあらざるかを憂へ、數多の金銀を曾呂利が方へ贈りけり。
- 八 十津川へ寄せんずる事は、たとひ十萬騎の勢ありとも叶ふべからず。
- 九 その時の事のみ思ひ出されて、再び參らまほしき心地す。
- 一〇 見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は、夜の錦なりけり。
- 一一 人は形ありさまの勝れたらんこそあらまほしかるべけれ。
- 一二 御前に持ちて參れば、宮はめでたくも書かれたるかな。など譽めさせ給ひて、御文は取らせ給ひつ。

第十五章 文語の助詞(一)

〔空〕 文語の助詞は、口語のとは違つた語を用ひる事があり、又同じ

第一種の助詞

語を用ひても、意味や用ひ方の異なるものがある。

〔六〕 第一種の助詞 主として體言に附くもので、「の」「を」「に」「へ」「と」「より」「にて」などを用ひる。

が 口語と同じく、主語を示す外に、又體言に連る修飾語をつくる爲に用ひることがある。

誰が宿 梅が香 君が代

の 體言を修飾する修飾語をつくる外に、主語を表はす爲に用ひる事が少くない。

月の明かなる夜 色の美しきを賞す。

秋の萩野にさを鹿の鳴く。

に 文語では、動詞「あり」に連つて、之と共に、指定の助動詞のやうな意味になる事がある。

此の土は樂園にあらず。

これと同じ意味で、下に續ける場合には、「に」して「を」用ひる。

正成は父にして、正行はその子なり。

今日は日曜にして祭日なり。

へ 文語では、主として方角を示す爲に用ひる。

西へ飛ぶ。 京都へ去る。

と 引用の場合には、體言の外に、文にも附く。

敵艦見ゆと報じ來る。

わが子悪しかれと祈る親はなし。

○この場合に引用文の終の用言の終止形を連體形にする事が現代の文語では許容されてゐる。

月出づると見えて……

「と」が對等の資格で並ぶ體言を結び附ける場合には、文語では

叔父と叔母とを訪ふ。

のやうに「と」を各語の下に附けるのが本格である。但し、現代文では、誤解を來すおそれのない場合には、最後の「と」を省いてもよい。

○次のやうな場合は、「と」を省けば誤解を來すおそれがある。

甲と乙との弟に逢ふ。

甲と乙の弟とに逢ふ。

より 口語と同じく、「山より高し」のやうに用ひる外に、口語の「からの代りにも用ひる。

大阪より歸る。 會は六時よりはじまる。

にて 口語の「で」にあたる。

東京にて逢ふ。 萬年筆にて書く。 病氣にて休む。

父は軍人にて、子は實業家なり。

彼は富豪にて慈善家なり。

○口語の第一種の助詞「から」「で」「は」は、文語には普通用ひない。

〔空〕 文語では、「を」して「を」を以て、「に」ついて「に」よつて「に」において「に」おける「などの連語を、第一種の助詞と同様に用ひる。

斥候をして敵狀を搜らしむ。

彼の沈着なる事は、これを以て知るべし。

これより戦況について語らん。

無線電信によつて危急を報ず。

東京において成功す。

平安朝における國文學の發達は、假名の發生に負ふ所多し。

〔六〕 第二種の助詞 主として用言に附いて、接續詞と同じやうなはたらきをするもので、「ば」「とも」「ど」「ども」「が」「に」「を」「て」「で」「つつ」などを用ひる。

ば 口語では、用言の假定形に附いて、假定の意味を表はすが、
文語では(一)未然形に附いて、假定の意味を表はす。
彼行かば我も行かむ。 價安くば買ふべし。
(二)已然形に附いて、口語第二種の助詞と又は「からの」意味を
表はす。

風吹けば波立つ。 心正しければ、物に恐れず。
今日は雨降れば外出せず。

この花美しければ、人に折らるるおそれあり。

とも 動詞の終止形、形容詞の連用形に附いて、口語の「ても」の
意味に用ひられる。

繪に書くとも筆も及ばじ。 苦しくとも忍ぶべし。

どども 用言の已然形に附いて、口語の「けれども」の意味に用
ひられる。

某は身賤しけれどども心の正しきものなり。

がにを 共に用言の連體形に附いて、口語第二種の助詞「が」の

「に」の意味に用ひられる。

昨日も捜したるが、見えざりき。

雨烈しきに、出で行けり。

かくとは思はざりしを、さても夥しき軍勢かな。

「に」はまた或事の起つた時をいふにも用ひられる(口語第二
種の助詞と)又は助動詞「たら」の意味。

ふと彼方を見るに、敵雲霞の如く押し寄せたり。

て 文語では連用形に付き、時として音便形に附く。

赤くて大きな花。

雨降りて降つて地固まる。

〇「て」は副詞に附く事がある。

四海波靜かにて天下太平なり。

○「て」はまた助詞「と」に附いて「とて」となる事がある。

昔天竺に祇園精舎とて名高き寺ありき。

で 動詞の未然形に付き、打消の意味が助詞「て」に加はつたものを表はす。

寝もせて夜を明かす。

つつ 動詞の連用形に付き、口語ながらの意味に用ひられる。

泣きつゝ語る。

讀みつゝ書取る。

○口語の「ても」「けれども」「の」「から」「ので」「し」は文語には用ひない。

○「處」「間」のやうな名詞は第二種助詞のやうに用ひられる事がある。

私事久しく病氣にて引籠り居り候處、今回全快致し候間、御安心下されたく候

練習題

一五

次の文の傍線を附けた助詞は、如何なる種類に屬するかを示せ。

- 一 父母の病あつければ、醫藥の効なきを知るとも、尙治療につとむるは人情の常にあらずや。心力を盡くして、しかも救ふ事能はざるは天命なり。事既にこゝに至る。われたゞ死せんのみ。
- 二 宣長は八歳の頃より讀み書きを習ひたりしが、後契沖の著せる書物を見て、國學に志し、遂に一代の大學者となれり。
- 三 行幸あまりに遅かりしかば、人をしてうかゞはしむるに、播磨の今宿といふ處より、山陰道にかゝり給ひし由なり。
- 四 されば美作の杉坂に待ち奉らんとて、げはしき山路をふみわけて、たどり着きたりしに、主上はや院庄に入らせ給ふといふ。
- 五 急がずばぬれざらましを旅人のあとよりはるゝ野路の村雨。

第十六章 文語の助詞(二)

〔六九〕

第三種の助詞 第一種、第二種以外のもので、「は」「も」「ぞ」「なむ

文語の助詞(二)

(なん)「こそ」か「や」だに「すら」さへ「し」のみ「ばかり」など「まで」
 「な」な……「そ」ばや「がな」かな「かし」よ「や」ななどが用ひられる。
 口語と意味や用ひ方の違つたものを挙げれば、次の通りである。
 ぞなむ(なん)かや 「ぞ」か「や」が用言や助動詞に附いて、文の終
 りに来る時、「ぞ」か「は」連體形に、「や」は終止形に附く。

何人の言ひけるぞ。 あるかなきか。
 ありやなしや

右の助詞及び「なむ(なん)」が文の中にあつて、用言や助動詞
 が之を受けて文を結ぶ時は、必ずその連體形を用ひる。

名残なく散るぞめでたき。

只今なむ参り來つる。

誰かある。 惜しくやあるべき。

こそ この助詞が文の中にあつて、用言や助動詞が之を受け

て文を結ぶ時は、必ずその已然形を用ひる。

時こそ來たれ。

かあなたに見ゆる蘆屋こそ我がなつかしの住みななれ。

かやうに、「ぞ」なむ(なん)「か」や「及び」こそを受けて、連體形及

び已然形で文を結ぶのを係結の法則といふ。

だにすら 口語の「さへ」でもなどの意味に用ひる。

いろはだに知らず。 治まれる今の世にすら此の如し。

さへ 口語の「までも」の意味に用ひる。

風さへ吹き出でたり。 残る一人の子にさへ別れたり。

し 意味を強めるのに用ひる。

吾亦考ふる所なきにしもあらず。

花をし見れば物思ひもなし。

のみ 口語の「だけ」「ばかり」などの意味に用ひる。

彼のみ喜ばざるはずなし。

残れるはこれのみなり。

なな：そ 共に禁止の意を表はす。「な」は動詞の終止形に、な

：「そ」は連用形に附く。

忘るな 　　な行きそ。

但し、「な」はラ變の動詞にはその連體形に附く。又、「そ」はカ變・

サ變の動詞には、その未然形に附く。

あるな。 　　なこ(來)そ。 　　なせ(爲)そ。

ばや 自己の希望を表はす。動詞の未然形に附く。

問はばや遠き世々の跡。

なむ(なん) 動詞の未然形に附いて、他に對してあつらへ望む

意を表はす。

苔の衣をわれに貸さなむ(なん)。

○この「なむ(なん)」を係として用ひる「なむ(なん)」と區別する爲に、願望の「なむ」といふことがある。

がな 多くの場合に助詞「も」に連つて、希望の意を表はす。

昔を今になすよしもがな。 　　これ無くもがな。

かな 體言又は用言・助動詞の連體形に附いて、感動の意を表

はす。

けなげなる男の子かな。 　　あゝ悲しきかな。

かし 言ひ切つた形に附いて、意味を強めるのに用ひる。

幸あれかしと祈る。 　　然覺ゆるぞかし。

やな 共に感動の意味を表はす。

あな嬉しや。 　　進めや進め。

いでや、目に物見せん。

花の色は、うつりにけりな。

心ある人に見せばやな、この雪景色。

練習題

一六

次の文から助詞を抜き出し、その種類を示せ。

- 一 われは賤しき身なれども、忠義の心ばかりは、いかでか人に劣るべき。
- 二 これのみは人の國より傳はらで神代を受けし敷島の道。
- 三 近き火などに逃ぐる人は、暫しとやいふ。恥をも顧みず、財をも捨てて去るぞかし。
- 四 父の世を去るまでは、都になむ住みける。
- 五 少將もさすが心にや懸けられけん、幼き者を今一度見ばや、とこそ仰せられけれ。
- 六 雲もみな波とぞ見ゆる海士もがな、いづれか海と問ひて知るべく、月をだに飽かず思ひて寝ぬものを時鳥さへ鳴きしきるかな。
- 七

八 義經馬を海中に乘入れて戦ふ折しも、脇ばさみたる弓を取落した

り。

九 源氏の兵ども、いかなる御寶なりとも、いかでか御命には代へ給ふべき。その弓捨て給へ」と申す。

一〇 義經「弱き弓を敵に取られて、これこそ源氏の大將が弓よ」と嘲弄せられんが口惜しければ、命に代へて取りたるぞや」といふ。

一一 鳥獸すら恩を知るといふ。ゆめ忘るなよ、君の深き御恵みを。

一二 人はただ誠の道を守らなむ高きいやしきしなはありとも。

一三 事の趣旨は必ずしも反對すべきにあらざれども、實行方法にはなほ攻究を要するところあり。

一四 父は國事をのみ憂へて、家事を顧るいとまなかりき。

一五 汝の命は御國にさゝげしものなれば、生きて歸らんとと思ひそ。

第三篇 品詞の轉成と語の構造

第十七章 品詞の轉成

〔10〕

(甲) 旅人に道を問はれて、親切に教へたり。

(乙) 旅人は親切なる教へに感謝せり。

(甲)の「教へ」は動詞として用ひられてゐるが、(乙)の「教へ」は、それから轉じて名詞となつてゐる。かやうに、或品詞に屬する語が、意味用法を變じて、他の品詞となる事を品詞の轉成といふ。

○品詞の轉成には、次のやうな種々のものがある。

一 名詞になつたもの

動詞の連用形から

舞ま 悟さと 流ながれ 恥はぢ とめ(人名) そめ(人名)

動詞の終止形から

相撲すま 陽炎やうえん 向ふむかの岡おか 勉つと人名 透とお人名

形容詞の連用形から

近くに移る 遠くより來る。多くを望まず

品詞の轉成

○形容詞の終止形から

からし(辛) すし(鮭) おもし(重鎮) 正ただし(人名) 尊たかし(人名)

感動詞から

あはれを催せり

二 代名詞になつたもの

名詞から

君 僕 わらは

三 動詞になつたもの

名詞から

てきたふ(敵對) さいしく(彩色) さうぞく(裝束)

四 形容詞になつたもの

名詞から

大人し まことし

動詞から

いさまし 煩はし 願はし うらめし たのもし

副詞から

甚し 未だし のどけし 静けし

五 副詞になつたもの

名詞から

つゆ知らず。ゆめ忘るべからず。

動詞から

たとひ死すとも退かじ。

六 接續詞になつたもの

動詞から

陸軍及び海軍

副詞から

山また山を越ゆ。はたもつとも

七 感動詞になつたもの

代名詞から
副詞から

おのれ、この怨は忘れぬぞ。
いかに辨慶之を何とか見る。

練語

一七

次の文から轉成の品詞を選び出し、何から轉じたかを述べよ。

- 一 兄弟の考には甚だしき隔りありて、二人にては之を決すること能はず、そのさばきを父に請へり。
- 二 頼もしき少年よと望をかけられたりし友の逝きしは、はや十年の昔となりぬ。
- 三 君がかゝる大志を懐かるゝを、つゆ知らずして、今日までたゞの客として遇しけることの恥かしさよ。
- 四 たとひ死すとも悔なしとする意氣を以てせば、いかに煩はしき事なりとも、必ず成功すべきものぞ。
- 五 明日午前中に御出で下され度候。もつとも御都合により、午後にも

ても差支之なく候。

- 六 吉野山霞の奥は知らねども見ゆるかぎりは櫻なりけり。
- 七 予は十五歳の時、多くのなつかしき友と別れて故郷を離れたり

第十八章 複合語

複合語

〔七〕 二つ以上の單語が合して一語となつたものを複合語といふ。複合語は、文法上一つの單語として取扱はれ、何れかの品詞に屬する。

○複合語の主な種類は次の通りである。

- 一 名詞
 - 石山 本箱 (名詞と名詞)
 - 紙挾 梅干 (名詞と動詞)
 - 釣竿 枯葉 (動詞と名詞)
 - 討死 往來 (動詞と動詞)
 - たゞもの また侍 (副詞と名詞)

第十八章 複合語

國々 日々 一つく (同じ名詞と名詞)

右の通り、動詞が複合語をつくるには連用形を用ひるのが常である。然るに形容詞はその語幹を用ひるのが通則である。

淺瀬 遠目 薄色 廣場 嬉し涙 夜寒 日長

末廣 賣り高 高笑 遠廻 長生 遠淺

二 代名詞

わ殿 (代名詞と名詞)

ここかしこ あなたこなた (代名詞と代名詞)

三 動詞

かへりみる 落ちいる こひねがふ (動詞と動詞)

心みる(試) 名のる 物語る (名詞と動詞)

近づく 長びく 遠ざかる (形容詞と動詞)

「罪す」勉強す「信す」なども複合動詞である。

四 形容詞

後暗し 肌寒し 心よし(快) (名詞と形容詞)

有り難し 待遠し 讀み易し (動詞と形容詞)

細長し 重苦し 薄暗し (形容詞と形容詞)

五 副詞

常に 嚮に もとより (名詞と助詞)

なにとぞ いづくにぞ(いづくんど) (代名詞と助詞)

すべて 定めて しきりに (動詞と助詞)

成るべく 絶えず (動詞と助動詞)

さぞ たゞに (副詞と助詞)

六 接續詞

故に 爲に (名詞と動詞)

されど 然らば よつて (動詞と助詞)

又は 但し しかも (副詞と助詞)

注意 「人々」なにく」などのやうに同じ語を重ねて出來た複合語を特に疊語といふことがある。

〔七〕單語が合して、複合語となる時、その單語の音が變ずる事がある。

連濁

この中、たなが「ほんだな」となるやうに、下の語の最初の音が濁音になる事を連濁といふ。

練習題 一八

- A 次の文から複合語を抜き出して、それがいかなる品詞に屬するか、又いかなる語から出來てゐるかを述べよ。
- 一 一つの雨粒は小なれども、多く降り續けば、橋を墜し、田畑を流す事あり。
 - 二 心もとなき日數かきなるまゝに、白河の關にかゝりて、旅心さだまりぬ。

- 三 去るものは日々に遠ざかり、來るものは刻々に近づく。
- 四 月日は過ぎ行けども、忘れ難きは、旅順に負傷して、道傍の草原の中に倒れたる時なり。
- 五 魚は至つて、清き水には棲ますして、却つてやゝ濁れる水に棲む。
- 六 いづかたに志してか、日さかりのやけたる道を蟻の行くらむ。

B 次の語の品詞とその成立とを述べよ。

道幅道幅 雨乞雨乞 テーブル掛テーブル掛 おもんばかりおもんばかり 慮慮 おとしいるおとしいる 陥陥 追ひ拂ふ追ひ拂ふ つまづくつまづく 極めて極めて 巧なり巧なり
 みにくしみにくし むしあつしむしあつし ますくますく 繁昌す繁昌す
 みだりにみだりに 入場する入場する なかれなかれ

第十九章 接頭語・接尾語

〔七〕 小松 初荷 さまよふ

右の「小」「初」「さ」のやうに、いつも他の語の上に附いて、或意味を加

接頭語

へるものを**接頭語**といふ。

〔七〕

時めく 神さぶ 海邊

接尾語

右の「めく」「さぶ」「邊」のやうに、いつも他の語の下に附いて、之に或意味を加へるものを**接尾語**といふ。

〔七〕

接頭語及び接尾語は、決してそれだけでは用ひられず、必ず他の語に附いてあらはれる。かやうなものを**接辭**といふ。

接辭

接辭が附いたものは、文法上、一語として取扱ふ。

〔七〕

接頭語の附いて出來た語の品詞は、もとの語と同一である。

接頭語と品詞

○接頭語の主なもの、次の通りである。

はつ雪	おほみ神	おん心	御機嫌	を田	小山
み山	まん中	き藥	す手	さ夜	(名詞)
ほの見ゆ	いや増す	た謀る			(動詞)
小高し	か弱し	を暗し	た易し		(形容詞)

〔七〕

接尾語の附いて出來た語の品詞は、接尾語によつてきまる。

接尾語と品詞

○接尾語の主なものは次の通りである。

一 名詞又は代名詞を作るもの

大佐殿	齋藤君	皇子たち	親ども
殿ばら	汝等	河邊	
二枚	三疋	四冊	五番
重み	厚さ	嬉しさ	怖け

二 動詞を作るもの

伴なふ	學者めかす	大人ぶ	才子ぶる
色ばむ	嬉しがる	花やぐ	

三 形容詞を作るもの

學者らし	序がまし	露けし	愛たし
------	------	-----	-----

四 副詞を作るもの

身づから	手づから		
若やかに	うれしげに	面白げに	

○若やか「うれしげ」「面白げ」は語幹となつて第二種の形容動詞をつくる。

練習題 一九

- A 次の文から接辭の附いてゐる語を選び出し、その成立を説明せよ。
- 一 眞夜中に峠を越えて東に下れば右の方に燈火のほの見ゆるに、かかるみ山の奥にも人は住むにやと、人々あやしがる。
 - 二 時の經つまゝに悲しさいや増して、堪ふべくもあらざりき。
 - 三 さ夜ふけてほの暗き燈の影ものさびし。
 - 四 片田舎より差出でたる人こそ、萬づの道に心得たる由のさしいらへはすれ。
 - 五 若君も十五歳の初陣には見事なる御手柄をたてられたり。
 - 六 煙たなびく村の方より、小高き岡に沿うて流るゝが、なつかしき旭川なり。

B 次の語から接尾語を抜き出し、且つその語の品詞を考へよ。

- | | | | | |
|-----|--------|-----|-------|-------|
| 宮がた | をかしき | 第三號 | 恥かしがる | 隔てがまし |
| 高ぶる | しのびやかに | | 深み | 鹽け |
| | | | 黄ばむ | |

第四篇 文の成分

第二十章 文と文の成分

〔夫〕 月は昇れり。

庭の櫻も美しく咲きたり。

右の例は、何れも一つの纏まつた思想を言ひ表はす一つ々きのことばである。即ち文である。

○文の終では必ずことばが切れる。文字で書く時は。を附ける。

すべて、文は單語から成立つものである。然るに、右の文の中の「月は」昇れり、「庭の櫻も」及び「美しく咲きたり」も、亦いくつかの單語が結合して或意味を表はしてゐるが、未だ全部が一つに纏まつて一つの文を成すに至つてゐない。このやうに、二つ以上の單語が結合してゐるが、まだ一つの文になつてゐないものを

文

主語 述語 (説明語)

連語

連語といふ。

月は 庭の 櫻も 汝に これも

庭の櫻 我が身 飛ぶ雲 暑き日

書を読む 何處へ行く 山に登る

美しく咲く 頗る高し いと穩かなり

昇れり 咲きたり 讀まず 犬なり

これ等はすべて連語である。その中、昇れり、「咲きたり」、「讀まず」、「犬なり」のやうに、助動詞が他の語に附屬したものを活用連語といふ。

活用連語

〔五〕 (甲) 日は 西に 没したり。

(乙) 月 山より 出づ。

右の文の中、(甲)は六つの單語から、(乙)は四つの單語から成立つてゐる。その中、「は」、「に」、「たり」、「より」は何れも附屬する語であつて、

いつも、「日」「西」「没し」「山」のやうな獨立する語と共に用ひられ、これ等の獨立する語が無ければ決して用ひられない。故に、右の文は、それ／＼

(甲) 日は 西に 没したり。

(乙) 月 山より 出づ。

の三つの部分から成立つものと見る事が出来る。これ等の部分は、相合して一つの纏まつた思想を表はし、一つの文となるのである。このやうに、文を組立てる各部分を文の成分といふ。

○文の成分には必ず獨立する語がある。附屬する語は、それだけで文の成分となる事はない。

〔六〕 文の成分には主語・述語・修飾語の三種と、外に獨立語といふ特別なものがある。

練習題 二〇

文の成分

A 次の文から活用連語を選び出せ。

- 一 諸君は、人にほめらるる人物となるべし。
- 二 日本帝國は、比類なき勝れたる歴史を有する國なり。
- 三 われ等は、この歴史を汚さざらんが爲に、常に滅私奉公を心がけざるべからず。

B 次の文を成分に分ち、その中の獨立する語と附屬する語とを指摘せよ。

- 一 獨逸軍はバリーに迫れり。
- 二 全軍勇んで出發せり。
- 三 清正は忽ち正國をねぢ伏せたり。
- 四 國民は遠く海外に出でて、われ等を歡迎する地に移住せよ。
- 五 我等の祖先は西邊より起りて東國に移り、其處の他民族を同化して、この國を建て帝業を創めたるなり。

第二十一章 主語と述語

〔八一〕

(甲) 花 咲く。

(乙) 波 高し。

(丙) 我は 日本人なり。

述語
主語

主語になる語

右の(甲)の文は、何が、どうするかを表はし、(乙)の文は、何が、どんなであるか、何を表はし、(丙)の文は、何が、何であるか、何を表はしてゐる。その中、「咲く」「高し」「日本人なり」のやうに、何が「どうするか」「どんなであるか」「何であるか」を表はす成分を述語といふ。また、「花」「波」「我は」のやうに、「何が」を表はす成分を主語といふ。

〔八二〕 主語になる語

(甲) 體言

花 咲く。

山も 見ゆ。

此處は 涼し。

誰か ある。

○この場合に體言の下に助詞を附ける事が多い。但し口語で「花が咲く」のやう

に體言の下に助詞「が」を付ける場合に文語では助詞を付けないのが普通である。

(乙) 用言又は活用連語の連體形

新しきがよきなり。

言ふは易く、行ふは難し。

驕らざるもまた滅ぶ。

○この場合に用言活用連語の下に助詞が附くのが普通である。口語では「新し
いのが言ふのはのやうに連體形の下に第三種動詞」が来るが、文語にはかや
うな助詞は用ひない。

(丙) 對等の體言の重なつたもの

米・生絲・杉材はこの地方の重要産物なり。

範頼と義経は兵を率ゐて西へ向へり。

東大寺及び興福寺は奈良にあり。

○この場合に助詞又は接續詞によつて體言を結び附ける事がある。

述語になる語

(八三) 述語になる語

(甲) 用言

授業 終る。 授業 終れり。

月 清し。 月 清からん。

何事も なかれかし。

○この場合に助動詞又は助詞を伴ふ事がある。

(乙) 體言

汝 何者なるぞ。

使者は 汝か。

彼は 何者ぞ。

われこそ 俊寛よ。

缺席者は 三人のみ。

○體言には指定の助動詞又は第三種の助詞を伴ふのが普通である。



(丙) 種々の語に動詞・形容詞の附いた連語

此處は 古戰場にて候。

鯨は 魚にあらず。

性質も 快活にはあらず。

御心も 優しうまします。

憂かりし 昔は 戀しくもなし。

殿下も 臨場し給ふ。

萬民 君徳を 仰ぎ奉る。

老臣等は 幼主を 扶けまゐらせたり。

〔八四〕 同じ主語に對する述語が、對等の資格で重なる事がある。

稲は 發育し、みのれり。

園内は 廣くして 美し。

人々は 驚き かつ 喜べり。

述語が重なるもの

彼は 温良にして かつ 恭謙なり。

○この場合に接續詞助詞を用ひる事がある。

練習問題

二

次の文の主語と述語とを指摘し、それが如何なる語から成立してゐるかを説明せよ。

一 授業終る。

二 残月淡し。

三 なつかしきは故郷なり。

四 人々は怒りかつ悲しめり。

五 攻むるは易く守るは難し。

六 忠と孝とは缺くべからず。

七 海上は静かにして鏡の如し。

八 彼は醫師にしてかつ畫家なり。

九 受賞者は級長並びに副級長のみなりき。

第二十二章 修飾語

〔八五〕

二人の 旅人は いたく 驚けり。

右の例の「二人のは」は主語たる體言「旅人」に附いて、その意味を委しく定め、いたくは、述語「驚けり」に附いて、その意味を委しく定めてゐる。それ故「二人の」「いたく」は修飾語である。

蠶は 繭を つくる。

蛹は 蛾と なる。

右の「繭を」「蛾とは、何を。をつくるか、何と。なるかを示して、漠然たる、つくる」なるの意味を精密にし、定めるものである。それ故に、「繭を」「蛾とも」修飾語と見るべきである。

○右の「繭を」「蛾とは、また用言「つくる」なるの意味の缺けた所を補ふものと見る事が出来る。それ故かやうなものを特に補語といふ事がある。

修飾語

補語

連體修飾語
連用修飾語

連體修飾語に
なる語

〔八六〕

修飾語には二種ある。前の例の「二人の」のやうに、體言を修飾するものを連體修飾語又は形容詞的修飾語といひ、いたく「繭を」「蛾と」のやうに、用言を修飾するものを連用修飾語又は副詞的修飾語といふ。

〔八七〕 連體修飾語になる語

(甲) 體言その他の語に助詞「の」「が」の附いたもの

北の 風。

いづこの 人。

今日までの 成績。

友よりの 電報。

しばしの 別。

たまくの 面會。

面白の 景色。

羨しの 風情。

我が 國。

誰が 宿。

君が 代。

重盛が 子ども。

○古代語には「の」の代りに「つ」を用ひたものがある。「國つ神」「沖つ白浪」など。

(乙) 用言又は活用連語の連體形

散る 花。 溢る 水。 靜かなる 夜。

睦じき 友。 鳴かぬ 鳥。 堅固なりし 防備。

(丙) 對等の體言又は用言が重なつたもの

忠臣・孝子の 事蹟。

太く短き 棒。

東洋と西洋の 獨立國。

佛教並びに儒教の 影響。

穩健にして適切なる 説。

強くしてしかも優しき 武士。

○この場合に助詞又は接續詞を用ひる事がある。

連用修飾語に
なる語

(八) 連用修飾語になる語

(甲) 副詞

道は 頗る 峻し。

汽車は 既に 出發せり。

月は さながら 盆の如し。

彼は 少しも 知らざりき。

(乙) 形容詞の連用形

友は 早く 歸り去れり。

選手等は 勇ましく 出發せり。

予も 嬉しくは 思はざりき。

(丙) 體言

試験は 昨日 終れり。

右翼は 二軒 進出せり。

書 讀む 暇も なし。

船は 東へ 向へり。

溺るゝ者は藁をもつかむ。
山田氏は詩に巧なり。
千里の路も一步より始まる。

○この場合に體言が單獨に用ひられるものもあり、又助詞が附くものもある。
○口語で助詞を附ける場合に、文語では附けない事がある〔花見る人など〕。

(丁) 用言又は活用連語

言はぬは言ふにまさる。
彼は大言するを好まず。
憂は豫め憂へざるより起る。

○以上は用言活用連語の連體形に第一種助詞が附いたものである。口語では「言ふのに」大言するのをのやうに多くの場合は第三種助詞のを附ける。

某は傲慢なれば、人に厭はる。
弟は怖れて、自後池に近づかず。

予は口惜しけれども、默せん。

友は笑ひつつ語れり。

汝苦しくとも、忍耐せよ。

○以上は用言に第二種の助詞が附いたものである。

(戊) 對等の體言が重なつたもの

秀吉 家康・利家を招く。

吾等は 京都と奈良に 宿泊せり。

暴風は 今夕又は明朝 襲來すべし。

某は 支那史並びに印度史に 精通す。

○この場合に助詞又は接續詞を用ひる事がある。

〔八九〕 若き 熱心なる 研究家は、終に 成功せり。

市内の 多くの 古き 建物は、かくて 焼失せるなり。

若葉は ひらくくと 風に ひるがへる。

隊長は 夜半 急に 部下をして 河を 渡らしむ。
右のやうに、同じ語に二つ以上の修飾語が附く事がある。

〔九〕

東に やゝ 高き 山 あり。

人を 恐るゝ 犬は 吠ゆ。

彼は 最も 困難なる 問題を 解決せり。

右のやうに、修飾語は、他の修飾語に附く事がある。

〔九〕

木の間に 高き塔と大なる屋根 見ゆ。

春の花と秋の月との 優劣を 論ず。

峯を攀ぢ谷を渉る 險路。

かやうに、修飾語が對等の體言又は用言のそれゝに付き、それ等が合して一の成分となる事がある。

修飾語が他の語と共に一の成分となるもの

練習題

三三

次の文から修飾語を選び出し、いづれの語を修飾するか、又いかなる種類の修飾語であるかを述べよ。

- 一 國民は自國の特長を知らざるべからず。
- 二 わが國は古來東海の君子國と呼ばれたり。
- 三 日本國民は一般に清淨の美を賞す。
- 四 秀逸と稱せらるゝ和歌はこの清淨美を捉へたるものなり。
- 五 鹿を追ふ獵師は山を見ず。
- 六 主従はしばしの別を惜しむたり。
- 七 昨夜の風雨全く霽れて、日は麗かに昇りぬ。
- 八 荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤を國學の四大人と稱す。
- 九 新院は齋院の御所より北殿に遷らせ給ふ。左府は車にて參り給ふ。
- 一〇 目的地に達せる時は、一同疲勞の極にありき。

第二十三章 獨立語

〔九〕

いざ、われ等も出發せん。

空は晴れたり。されど海上は波高し。

右の文に於て、「いざ」「されど」は、文の成分ではあるが、主語述語修飾語の何れでもなく、他の成分とは直接の關係が無く、比較的獨立したものである。かやうな成分を**獨立語**といふ。

〔一〇〕

獨立語には(一)感動又は應答を表はすもの、(二)呼び掛けるもの、

(三)特に重要な事物を提示するもの、及び(四)接續の意味を表はすものがある。

〔一〇〕

獨立語になる語

(甲) 感動詞

あはれ、花も散らんとす。

や、殿は何と仰せられ候ぞ。

いな、これは見るべきものにあらず。

すはや、敵の現れたるぞ。

いかに、辨慶、敵に弓勢を見せよかし。

(乙) 體言

嗣信、いかゞ覺ゆるぞ。

者ども、進めや、進め。

蝶よ、菜の葉にとまれ。

○以上の如く體言は呼び掛けに用ひられる。

昭和十二年七月七日、國民は永くこの日を忘るべからず。

大日本帝國は、萬世一系の天皇之を統治す。

電燈も、その發明者はエヂソンなりき。

○以上の如く體言は提示にも用ひられる。

獨立語

獨立語の種類

獨立語になる語

(丙) 接續詞

道は峻しきにあらず。されど、歩行頗る困難なり。千丈の堤も蟻穴より頽る。故に、小事とて看過すべからず。敵國外患あれば、則ち、その國安し。家富めども、しかも、心驕らず。

○右のやうに接續詞が接續の意味をもつて獨立語となる。

(丁) 體言が重なつたもの

月・雪花、この三者は古來詩人の賞するところなり。山と海と、汝は何れを好むか。

鐵道大臣又は内務大臣は、當分總理大臣之を兼任す。

注意 獨立語は主語・述語・修飾語以外の成分である。それ故その意味や形から獨立語のやうに見えるものであつても、主語・述語・修飾語と見る事が出来るものは獨立語として取扱はない。

獨立語に修飾語が附く

(九五)

體言の獨立語には、修飾語が附く事がある。

一時の安易、絶えず戒愼せざるべからざるはこれなり。

練習題

二三

A 次の文から獨立語を選び出せ。

一 鐵道信號、これには常置信號と手相圖てあひづと列車信號とあり。

二 あゝ、壯なるかな、その意氣や。

三 誇大の言語を弄するは易し。されど適當の言語を選ぶは難し。

四 自然の意味は、自然のみ之を知る (ゲーテ)

五 いかにも母御前、父はいづくにおはしますぞや。

B 次の傍線を施した部分は成分上何に屬するかをいへ。

一 再び實なる木はその根必ずいたむ。

二 山の麓は雪や降るらん。

- 三 死の門は、何人も之を鎖すこと能はず。
- 四 煙のあるところ必ず火あり。
- 五 右方の煙の見ゆるところ、あれこそわが懐しき故郷なれ。

C 次の文を成分に分ち、その種類をいへ。

- 一 公園の花もはや咲きたり。
公園は主語、花もはや咲きたりは述語。
- 二 良薬は口にながし。
良薬は主語、口にながしは述語。
- 三 笑ふ門には福來る。
笑ふ門は主語、には福來るは述語。
- 四 悪人に愛せらるゝは憎まるゝより倍し。
悪人に愛せらるゝは主語、は憎まるゝより倍しは述語。
- 五 この軍に戦死せる人々、その名は既に發表せられたり。
この軍に戦死せる人々は主語、その名は既に發表せられたりは述語。
- 六 犬はよく人に馴る。されば、古來之を飼ふ者多し。
犬はよく人に馴るは主語、されば、古來之を飼ふ者多しは述語。
- 七 彼は有名なる倫理學者なれども、道徳家にはあらず。
彼は有名なる倫理學者なれどもは主語、道徳家にはあらずは述語。
- 八 われ等は、初對面の人より、ねんごろなる待遇を受けたり。
われ等は、初對面の人よりは主語、ねんごろなる待遇を受けたりは述語。
- 九 若人よ、時には静かに反省せよ。
若人よ、時には静かに反省せよは主語、は述語。
- 一〇 武士の子は、雄々しく優しく育てられたるなり。
武士の子は、雄々しく優しく育てられたるなりは主語、は述語。

第二十四章 文の成分の位置と省略

〔六〕 一つの文の中の種々の成分の並べ方には、一定の順序がある。

日本は 神國なり。

風 烈しく、浪 高し。

かやうに、主語は初に、述語は終に來るのが普通である。

夏の 日光は さんくんと ぶりそぐ。

敵は 堅固なる トチカに 據れり。

かやうに、修飾語は修飾せられる語の前に來るのが普通である。

予は 珍しき 愉快なる 話を聞けり。

弟は昨日 友より 辭書を 借りたり。

主語 述語

修飾語と修飾せられる語

二つ以上の修飾語

先日の 關東地方の 大雨は 各地に 大損害を
與へたり。

右のやうに、同じ語に對して二つ以上の修飾語がある場合に、ど
れが前に來るかは定まりが無い。

さても、はかなきは人の命かな。

滅私奉公、國民は寸時も之を忘るべからず。

智者も千慮に一失あり。故に、過を見て直ちにその人
を侮るべからず。

右のやうに、獨立語は、文の最初に來るのが普通である。

〔七〕 歌へよ歌へ 若人は。

倒置

池中に 島あり。

事件は 解決せりや、豫想の如く。

とまれ 胡蝶よ、菜の花に。

右のやうに、語勢を強め又は語調を整へる爲に、成分の普通の位
置を變へることがある。これを倒置といふ。

〔八〕 (汝は) 直ちに 出發せよ。

汝は (之を) 知らずや。

片桐殿には これより 何處へ (參らるゝか)。

堪忍は 一生の 寶なり。

前後の關係や、その場の事情で、容易に補ひ得る文の成分は、右の

やうに、之を言ひ表はさない事がある。之を省略といふ。

練習題

二四

次の文に成分の倒置又は省略があつたら指摘せよ。

- 一 道路の左側を通行すべし。
- 二 東京は昔江戸といへり。
- 三 節儉は諸徳の母。
- 四 千里の道も一步より。
- 五 思はざりき、今日この事あらんとは。
- 六 屋外は風雨の聲もの凄し。午後犬を伴なうて散歩す。林に入りて黙坐す。水、林より出でて林に入る。落葉を浮べて流る。
- 七 謂ふなかれ、今日學ばずして來日ありと。
- 八 熊谷の後より武者こそ二騎つゞいたれ。熊谷誰そと問へば、季重と答ふ。「問ふは誰ぞ。」直實ぞかし。「いかに熊谷殿はいつよりぞ。」宵より」とこそ答へけれ。

第五篇 文の構造と文の種類

第二十五章 文の構造と節

〔九〕 文の成分は、主語、述語、修飾語及び獨立語である。文は通常、これ等の成分が結合して出来るものである。その中、最大切なのは主語、述語であつて、文は普通、主語、述語が中心となつて成立し、或場合には之に獨立語が加はり、又、これ等の成分に、一つ又は多くの修飾語が附いて、複雑な形になるのである。

修	主	修(三)	修(二)	修(一)
關ヶ原の	古戰場は	この	山の	向側に
述				
あります。	(口語)			
修	獨	主	修(二)	修(一)
熱烈なる	愛國心、	これこそ	國家を	支ふる

主部 述部
獨立部

柱石なれ。
述

一善を興すは 一惡を除くに 如かず。
修(一) 主 修(二) 述

〔100〕主語述語又は獨立語と、之に直接間接に附く成分とを合せて

主部述部及び獨立部と名づける。さすれば、文は、

主語又は主部 述語又は述部

又は、之に獨立語又は獨立部の附いたものから成り立つのが常である。

關ヶ原の古戰場は この山の向側にあります。
主部 述部 (口語)

熱烈なる愛國心 これこそ 國家を支ふる柱石なれ。
獨立部 主部 述部

一善を興すは 一惡を除くに如かず。
主部 述部

〔101〕かやうに、主語述語は大切なものであるけれども、前後の關係

主語・述語を
省略した文

又はその場の事情で明かにわかる場合には、之を省略して言ひ表はさない事がある。その場合にも之を一つの文と見る。

進め。早く來い(口語) 悲しいかな。殿はいづこに。

〔101〕(甲) 電燈が消えた。口語

月清し。

(乙) 電燈の消えた時は、八時頃であつた。(口語)

予は月清き夜を好む。

(甲)の例は、主語と述語とがあつて、纏まつた思想を表はす完全な文である。然るに、それが(乙)の如く用ひられると、他の文の一部分となる。かやうに、主語述語を具へた一つの文と同等なものが、他の文の一部分になつたものを節せつといふ。

〔101〕(乙) 日の暮れるのが 早くなつた。(口語)

言葉のぞんざいなものも いけない。(口語)

節

主語節

節操なきは 男子の恥なり。
鳥の飛ぶ 見ゆ。

かやうに、文の主語として用ひられた節を主語節といふ。

○主語節では、述語が連體形になり、その下に種々の助詞を附けるのが普通である。但し、文語では助詞を附けない事がある。

〔104〕 齋藤は 頭がよい。(口語)

高野山は 弘法大師が開いたのです。(口語)

東京は 人口多し。

この書は 孔子の作れるなり。

かやうに、文の述語として用ひられた節を述語節といふ。

○述語節では、述語は普通の文そのまま、か又は連體形に(口語では連體形に)をつけたものに助動詞を附ける。

〔105〕 形のよい 山が見える。(口語)

述語節

連體修飾節

汽車は 秋草の盛りな 野を進む。(口語)
我等は 老杉の並立せる 參道に達せり。
自信なき 言は弱し。

かやうに、連體修飾語として用ひられた節を連體修飾節といふ。

○連體修飾節の述語は連體形をとる。

〔106〕 (甲) 私も 氣持よく 話した。(口語)

先生は 言葉やさしく 諭しけり。

我が艦隊は 威風堂々と 入港せり。

(乙) 誰も、子供の泣くのに 閉口した。(口語)

私共は 演説の始まるのを 待つてゐた。(口語)

予は 櫻のいさぎよきを 愛す。

落花は 蝶の舞ふに 似たり。

(丙) 鐘が鳴つたが 先生はまだ見えない。(口語)

連用修飾節

天氣が悪いので 人出が少い。(口語)
始よければ 終もよし。

春は來れども 寒さ未だ去らず。

かやうに、連用修飾語として用ひられた節を連用修飾節といふ。

○連用修飾節は(甲)では述語が形容詞の連用形又は副詞そのまゝである。(乙)では連體形の述語に(口語)では連體形の述語の下に第三種の助詞の附いたものに第一種の助詞が附く。(丙)では述語たる用言に第二種の助詞が附く。

〔104〕 齋藤の缺席したのは これには少し譯がある。(口語)

君が失敗するとは これは全く意外だった。(口語)

平氏の滅亡せるは 中心人物の缺乏がその主因となれる

なり。

同じ枝をわきて木の葉のうつろふは 西こそ秋の初なり

けれ。

獨立節

かやうに、獨立語として用ひられた節を獨立節といふ。

○獨立節は、述語が連體形で、その下に種々の助詞を附ける事が多い。

〔105〕 主語節・述語節・連體修飾節・連用修飾節・獨立節は、何れも一つの

文の成分をなすものである。このやうな節を從屬節といふ。

〔106〕 山が峻しく、 谷が深い。(口語)

松青く、 砂白し。

右の文に於て、傍線を附けた部分は、何れも節であるが、その節は文の或成分になつてゐるのではなく、互に對等の資格で結合して、一つの文を組立ててゐる。かやうな節を對立節といふ。

〔107〕 對立節の中、最後にあるものの外は、いつも下の對立節に連續

するものである。かやうな節は、その述語の部分が特別の形と

なる。

(甲) 兄は耕し、 弟は草をとる。(口語)

從屬節

對立節

雨も降るし。風も吹く。(口語)
 汽笛も鳴れば。サイレンも鳴る。(口語)
 病は口より入り。禍は口より出づ。

○右のやうに動詞は連用形となる。口語では第二種の助詞「し」や「ば」を用ひる事もある。

(乙) 道も遠く。夜もふけた。(口語)

海が浅くて。水が濁つてゐる。(口語)

庭も広いし。家も大きい。(口語)

品もよければ。値段もやすい。(口語)

日なたは暑く。日かげは涼し。

鶴の脛は長くして。鴨の脚は短し。

○右のやうに形容詞は連用形を用ひるか又は之に口語は「て」文語は「して」を附ける。口語では助詞「し」や「ば」を用ひる事もある。

○動詞形容詞の連用形そのままが右のやうな節の述語に用ひられた場合には之を中止法といふ事がある。

(丙) 海が穏かて。波がない。(口語)

國平かにて。民安し。

品行方正。學術優等なり。

○右のやうに形容動詞第二種に屬する語は口語では語幹に「て」を附け文語では語幹に「に」にて「にして」を附ける。又語幹が漢語である場合には語幹そのままを用ひる事がある。

(丁) 草茫茫として。人跡絶えたり。

海漫々。風浩浩たり。

○右のやうに文語の形容動詞第三種は語幹に「として」を附け時として語幹そのままを用ひる。

(戊) 範頼は兄で。義経は弟だ。(口語)

父は軍人にて。子は音楽家なり。

花は紅 柳は緑なり。

○右のやうに體言を述語としたものは、口語では「で」、文語では「にて」「にして」を附けるのが普通である。又時には體言そのままを用ひる。

練習題

二五

A 次の文を主部・述部・獨立部、又は主語・述語・獨立語に分けよ。

- 一 この雨は、なか／＼やむまい。(口語)
- 二 例の事件ね、あれはうまく解決されましたよ。(口語)
- 三 東西に對立する東京と大阪、これ我が國の二大都市なり。
- 四 利根・氣根・黄金の三こんは、事を成すに缺くべからず。
- 五 われは十一歳の秋より繪畫を習へり。
- 六 衆人の前にて我が主を辱しめたる者は何人ぞ。
- 七 薄き濃き山の紅葉はさながら錦を織れるが如し。

B 次の各例は文と見るべきか否かを述べよ。

- 一 「おい、待て。」「私ですか。」(口語)

二 「困つたな。」「どうしたのです。」(口語)

三 「やよ、汝は。」「御内の者に候。」

四 「さてその返答は。」「只今は申さじ。」

五 義經「さては案内よく知つたるらん。」老翁「いかでか存知仕らでは候ふべき。」義經「さぞあるらん。」

C 次の文の傍線を附けた節の種類を問ふ。

一 私の起きたのは五時でした。(口語)

二 父も近頃白髪が多くなりました。(口語)

三 私は社會の複雑なのに驚きました。(口語)

四 波の音もかすかなる物思、まさる夕なりき。われひとり宿を立出でて、海邊をさまよふ。入日の影は雲にのみ残りて、月未だ昇らず。夕なぎに千鳥の鳴くを聞きつゝ、進めば、いつしか身の病むをも忘れて、心自ら平らかなり。白砂に足を投げ出して、心の安らかなるは、境の然らしむるところか。など思ひ耽ること多時。ふと願れば、

東天の著しく明きは、やがて月の出づるを報するなりけり。

五 この歌は紀貫之の詠めるなり。

六 彼の幼時苦學せるは、人多く之を知らず。

七 霜は木々の梢を色美しく染め出せり。

八 花笑ひ鳥歌ひ、天長閑に霞み、水緩やかに流る、春の日に當りても、

快き事のみ懐に満つべくはあらず。

D 次の文に、いかなる節があるかを示せ。

一 サイレンが鳴ると、直ぐ燈火が消えた。(口語)

二 君達がさう言つてくれるのは、それは本當に有難い。(口語)

三 歴史の成績は甲で、地理は乙だった。(口語)

四 孔子は正義の念強き人なりき。

五 人々は靜肅に式のはじまるを待てり。

六 選手等は意氣揚々と入場せり。

七 人の失敗するは、多く注意の足らざればなり。

八 君の奮闘せられしは、われ等も確かに之を認む。

九 成敗は時の勢によりて分れ、是非は後世の論によりて定まる。

一〇 我^{わが}他^たに對して同情を缺かば、他人もまた白眼を以て我を視るべし。

一一 西風冷かにして、慘たる鳥聲秋の恨を語る。

一二 意志の強きものは、世界をして自己を摸せしむ。(ゲーテ)

第二十六章 文の種類

〔二二〕 文は構造上から分類すると、次の三種となる。

單文 複文 重文

〔二三〕 雨が 降り出した。(口語)

演説は まだ終るまい。(口語)

春日 遅々たり。

若き日は 再び來らず。

單文

富士は 雲表に聳立す。
右の例のやうに、主語・述語の關係が一回しか成立せぬ文を單文といふ。即ち、單文は節を含まぬ文である。

桃や櫻は 散つた。(口語)

あ、見えた、尾が、足が、頭が。(口語)

奈良・京都は わが國の舊都なり。

水 清くして又冷かなり。

父も母も兄も弟も 驚きかつ喜べり。

右の諸例は、主語や述語が多く、語から成り、又は重なつてゐる。しかし、主語・述語の關係は唯一回だけしか成立たない。それ故、皆單文である。

〔二三〕 櫻の咲く頃は一番よい。(口語)

意志の強いのは彼の長所である。(口語)

單文の主語述語

複文

この器は亡父の愛玩せる遺品なり。
骨は朽つとも、名は朽ちじ。
浄土宗は、法然の開けるなり。
彼の失敗するなど、誰か之を信ぜんや。
右の例のやうに、文の成分に節がある文を複文といふ。複文は從屬節を有する文である。随つて、主語・述語の關係が二回以上成立つ。

〔二四〕 土地が高く 景色がよい。(口語)

色がきれいで 形も面白い。(口語)

地震ひ 火起る。

人に千日の好なく 花に百日の紅なし。

部下多く戦死し 食料乏しく、彈丸また盡きんとす。

右の例のやうに、對立節から成立つてゐる文を重文といふ。隨

重文

文の性質上の分類

つて、重文では、主語、述語の関係が二回以上成立つ。

〔二五〕 文はその性質上から分類すると、次の四種となる。

平叙文 疑問文 命令文 感動文

〔二六〕 涼風がそよ／＼と吹く。(口語)

公報はまだありません。(口語)

百聞は一見に如かず。

やがて快報至らん。

事件はこれ以上發展せざるべし。

右の例のやうに、**断定肯定否定**や**推量の意味を述べるだけの文**を**平叙文**といふ。

〔二七〕 演奏が始まりましたか。(口語)

誰が承諾するものか。(口語)

汝何人なるぞ。

平叙文

疑問文

汝は之を我に語りしにあらずや。
人の命は、雨のはれ間をも待つものかは。

右の例のやうに、**疑問の意を表はす文**、及び**反語の意を表はす文**を**疑問文**といふ。

〔二八〕 ちよつと待つて下さい。(口語)

そんな事は言ふな。(口語)

悪を友とするなかれ。善を友とせよ。

急ぎいづかたへも忍ばせ給へ。

軒端の梅よ、春を忘るな。

いたくな歎き給ひそ。

右の例のやうに、**命令禁止の意を表はす文**を**命令文**といふ。

〔二九〕 おや、また曇つて來ましたね。(口語)

まあ、きれいな花ですこと。(口語)

命令文

感動文

はかなき人生よ。
あな、うれしや。
さても、頼みがたき人の心かな。

右の例のやうに、感動の意を表はす文を**感動文**といふ。

〔110〕文語では、平叙文疑問文を終止する用言又は活用連語が、助詞「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」を受ける時は、終止形の代りに連體形を用ひる。又「こそ」を受ける時は已然形を用ひる。之を**係結の法則**といふ。

緑なる一つ草とぞ。春は見し。秋はいろくの花にぞありける。
さらば、それになむ。定むべき。
人々集まりて、今日は市の日になむ。當りたる。とぞいふなる。
この亂れに公卿の命をおとす。こそ。淺ましけれ。

係結の法則

煙たなびく苦屋。こそわが懐しき住家なれ。
月や。出でたる。
これよりいづかたへか。進むべき。

注意一 副詞「い」か「が」を受けた活用語も亦連體形で終止する。

客のもてなし様は、い。か。があるべき。

注意二 係結の法則は活用語で文を終止する時に限つて行はれる。それ故活用

語が助詞を付け又は他の語に連る場合には適用されない。

うき世には長らへじとぞ。思へども ……

古は車もたげよ。火かゝげよとこそ。いひしを ……

注意三 「ぞ」「なむ」「こそ」を受ける用言を略することがある。

彼我互に戦備に忙しとぞ。聞く

人々はたゞ驚き怖るゝのみなりとなむ。いふ

いかさまもあるべきにこそ。あれ

注意四 係結の法則は口語には行はれない。

練習題

二六

A 次の文は、構造上如何なる種類に属するかを述べ、また節を含むものは、その節の種類を述べよ。

- 一 奈良も京都も古い帝都であつた。(口語)
- 二 川幅が廣く、水量が多い。(口語)
- 三 子供等は皆行儀がよい。(口語)
- 四 規則正しく勉強しなければならぬ。(口語)
- 五 鯉は黒潮の流るゝ暖き海に棲む。
- 六 われ等は心ゆくばかりその絶景を眺めたり。
- 七 石炭の火は、木炭の火よりも熱度高し。
- 八 金の貴きは、何人も之を知る。されど、鐵の貴きは、之を思ふ者多からず。
- 九 能ある鷹は爪を隠す。
- 一〇 内海の沿岸には名勝の地少からず。

- 一一 年々花は變らねども、歳々人同じからず。
 - 一二 清正と正國とは組みつほぐれつ互に争へり。
 - 一三 清正、正國をねぢ伏すれば、正國は清正の鎧の裾をしつかとつかむ。
 - 一四 年少者は希望に生き、老人は追憶に生く。
 - 一五 昔より賢き人の富めるは稀なり。
 - 一六 風凧、日和らぎ、何處ともなく春意動きて、早咲きの梅五六輪村落の籬に香る。
 - 一七 大勇は怯なるが如く、大智は愚なるが如し。
- B 次の文は性質上どの種類に属するかをいへ。又、係結の法則の行はれてゐるものがあつたら、之を指摘せよ。

- 一 日の丸の旗が、ひら／＼と翻つてゐる。(口語)
- 二 おう、今日は開校記念日だつたな。(口語)
- 三 みんな油断するな。しつかりしろ。(口語)
- 四 財寶は大路に引き散らされて、馬蹄の塵となれり。

- 五 折に觸れば、何事かはあはれならざる。
- 六 まさなうも敵に後を見せ給ふものかな。
- 七 ゆめ忘るゝなかれ、今の言を。
- 八 おほかた家居にこそ事ざまは推測らるれ。
- 九 「鹿の通はんずる所を、馬の通はざるべきやうやある。汝案内者せよ。」この身は年老いて、いかにもかなひ候ふまじ。」さて汝に子はなきか。」さぶらふ。」
- 一〇 「さてその文は、いづくよりいづちへ參らせらるゝぞ。」これは京より、女房の、八島の大内殿へ參らせられ候。源氏既に淀川尻に出で浮んで候へば、定めてそれをこそ告げ申され候ふらめ。」げにさぞあるらむ。者ども、その文奪へ。しやつ搦めよ。罪つくりに頸な切りそ。」

C 次 of 文語文に誤があつたら正し、その理由を説明せよ。

- 一 われ等は君國の爲にこそ死すべきなり。

- 二 武士の戦場の露と消ゆるは、古今珍しくも候はぬ。
- 三 御自ら畑を耕させ給ふぞかしこけれ。
- 四 今朝はいかが覺ゆ。心地よきか。
- 五 日頃歎きつる心は、今日なん安らかになりぬ。
- 六 「君の爲に命を捨つるは、この時にこそ。」と思ひ定めたれ。
- 七 見る者皆感泣せりとなん聞えき。
- 八 「我こそ御行方知り參らせたり。」と申す者一人もなかりけれ。
- 九 「生をこの國に享けたるぞよなき幸なり。」と古人もいはれたる。
- 一〇 人にこそ語らね。盡忠報國の念は何人にか劣るべき。五尺の身體は大なるにあらざれども、祖先より傳へたる血は全身に溢れたれ。

D 次 of 文を成分に分けてその種類をいひ、且つ各文の構造上の種類を述べよ。

- 一 われ等は、いかなる困難に際會すとも、必ず之を突破すべき堅き意

- 志を有せざるべからず。
- 二 冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、げにあはれ深きものなれ。
- 三 春の花は概してあわただしく散れども、秋の花には久しきに堪ふるもの少からず。
- 四 冬至も近づきて、今年の日數も残り少くなれり。
- 五 年の終るは惜しむべく、齡のかさなるはいとはしけれども、新しき年を迎ふるは喜ぶべし。

改制
新文典 女子上級用 終

補充問題

補充問題

一 (第二一三章)

次の文の傍線を附けた語の品詞をいへ。

- 一 日本帝國は世界に類のない美しい立派な國である。(口語)
- 二 私は日本に生れたことを、感謝しない日はない。(口語)
- 三 目的のあるところには必ず活動あり。活動は常に新趣味を伴なふ。されば世に生れて目的なき者は、遂に人生の趣味を解せざるべきなり。
- 四 かしこに見ゆるは寄手の軍か。いざ、打出でて一氣に蹴散さん。
- 五 君の主張は誤れるにはあらず。然れども、之を實行せしむるには、更に一段の工夫を要す。
- 六 やあ、城門を攀ぢ登るは味方の兵なるぞ。あれ討たすな。續けや

者ども、續け。

七 地球より太陽までの距離は、凡そ一億五千萬軒にして、月への距離の約四百倍に當るといふ。

補充問題 二 (第四十一章)

A 次の文から、名詞・代名詞を抜き出し、代名詞はその種類をいへ。

一 事を會議に附するは、諺に、「三人寄れば文珠の智慧」といふ趣旨に基づけるなり。

二 汝の説は實狀に適切なれば、誰か異議をはさむべき。予は雙手を舉げてこれに賛成せんとするものなり。

三 假りに月の直径を三糶とせば、地球の直径は十二糶、太陽の直径は實に十三米に達すといふ。

四 エマーソン嘗ていふ、雪なき所に文化なしと。これ文化が努力の賜物なる事を、最も巧妙に言ひ表はしたる名言なり。

五 シクラテスとキリストとは、いづれもその天壽を全うするを得ず

して、悲惨なる最期を遂げたり。

B 次の傍線を附けた動詞の活用形を考へよ。

一 日はすでに没して足は疲れたり。 人家あらば請ひて宿借らんと、 一人とぼく／＼と進む。

二 満山に響けと、あらん限りの聲を出して呼べども答ふる人はなく、 たゞこだまの之に應ずるのみ。

C 次の文中の動詞の活用の種類をいへ。

一 今日は珍しくも雲收りて空の色も心地よければ、友を誘ひて利根川のほとりに遊ぶ。

二 見る度毎に新しきは、朽ちず盡きざる自然の様なりけり。

三 草も木も、綠美しき若葉を伸べて、活々と大氣を呼吸する様、誠に見ゆる心地す。

四 松が根に咲きたる一もとの花あり。 蘭かと思へば蘭にあらずして、あらゝぎの花なりけり。

- 五 「一卵を盗む者は一牛をも盗まん」といふ西洋の諺は、悪の増長することを戒めたるものなり。故に悪しき事と知らば、たとひ小事なりとも、直ちに之をやめよ。
- 六 「死なば諸共にと誓ひし戦友と別れて、空しく病床に呻吟する身の口惜しさよ」と、白衣の袖をぬらすことも少からざりき。
- 七 義貞は大軍を率ゐて東國に向ひ、一擧に足利氏を撃滅せんとす。
- D 次の文から形容詞・形容動詞を抜き出し、その活用をいへ。
- 一 手の悪しき人の憚らず文書き散らすはよし。見ぐるしとて人に書かするはうるさし。
- 二 惨澹たる苦心を重ねること十二年、彼は遂に大發明を完成して、赫赫たる名聲を博するに至れり。
- 三 正直なる者も、知識なければ重き任にたへず。知識ある者も、不正直なれば信任せられず。
- 四 心よからぬ者を友とすることなかれ。言葉の巧なる者に心を許すべからず。

許すべからず。

- 五 暑かるべき夏は、雨多くして涼しかりしが、秋に入りてより麗かなる日續きて、草花の色も一入美しく見ゆ。

E 次の文に誤があつたら正せ。

- 一 老ひてますく盛なりとは、彼の如き者をいふか。
- 二 予は、楠氏の傳を讀むでここに至る毎に、正成の心中を思ふて涙落つるを禁づる能はず。
- 三 久しゆう聞かざりし鳥の聲の、今朝しも朗かに聞えたる嬉しさ、譬えん方もなかりき。
- 四 古諺に「笑う門には福來る」と云えり。
- 五 彼は泣るて訴うれども、遂に容れられざりき。
- F 練習題一(八頁)の第六以下、練習題二(一二頁)の第五以下の文、及び練習題三のBの文(一四頁)から、動詞・形容詞を抜き出し、その活用の種類をいへ。

G 練習題一(八頁)の第六以下の文、及び練習題四(一六頁)の文に、副詞接續詞があつたら之を指摘し、副詞は何を修飾するかを示せ。

補充問題 三 (第二十六章)

A 次の文から助動詞を抜き出し、その種類と活用のしかたとを示せ。

一 頼朝、高綱に向ひて、「この馬、所望の人数多ありつる中に、舍弟瀧冠者も申しき。殊に梶原源太直參して平に申しつれども、若しもの事あらば乗りて出でんすればとて、遣さざりき。その旨を存せられよ。」と仰せければ、高綱畏りて出でにけり。

二 さし昇る朝日の如くさわやかに、もたまほしきは心なりけり。

三 今日來すば明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや。

四 あはれ、院は隱岐に遷されさせ給ひぬ。

五 白河樂翁公、年十二にて田安邸にありし頃、麻布鳥居坂の戸川内膳の邸宅より火起り、大火といふにあらざれども、焼死せし者多かり

しかば、この火事は人の命をとりる坂これより上のとがはないぜんと落首せる者ありけり。近侍の人々「いかにもよく詠みたり。」と評し合ひけるを君聞き給ひて、余が詠まんには、さ言はじ。」とありければ、人々「さらば何とか詠ませ給ふ。」と問ひ參らするに、「第四の句を『怪我の事なり。』とすべきなり。」と仰せらる。一句にて一首の意味を全く顛倒せしめ、過のやみ難きに出づるを明かにせられしは、誠に驚くべきなり。

B Aの各文から助動詞を抜き出し、その種類を示せ。

C 練習題八(三六頁)のB、及び練習題九(四二頁)から助動詞と助詞とを抜き出し、その種類を示せ。

補充問題 四 (第二十四章)

次の文を成分に分ち、その成立を説明せよ。

- 一 善人榮え、悪人滅ぶ。
- 二 水は低きに就く。

- 三 これは珍しき品なり。
- 四 汝も缺席せりや。
- 五 枯れたるは松のみなり。
- 六 軽きは上に昇り、重きは下に降る。
- 七 母を慕ふは幼兒の常なり。
- 八 恩賜の御衣今ここにあり。
- 九 すは、かなたの森蔭より敵の押寄するぞ。
- 一〇 いかにか、源太殿、御邊は一方の大將にあらずや。
- 一一 敵に後を見するが如き臆病者は、味方には一人もなきぞかし。
- 一二 中空にかかれる月影清くさやけし。

補充問題

五 (第二十五—十六章)

- A 次の文は構造上如何なる種類に屬するかを述べ、また節を含むものは、その節の種類を述べよ。
- 一 怠らず勉むる者は、必ず成功す。

- 二 死を忘るゝ人の、養生を怠ることをかしかれ。
 - 三 義は金鐵よりも堅く、死は鴻毛よりも軽し。
 - 四 前進する味方と見えし一隊は、近づき見れば、敵の退却するなりき。
 - 五 先生は、晝は衆人と共に武を講じ、夜は燈下に書を讀まれたり。
 - 六 君はこれに賛成すとも、余は断じて同意せじ。
 - 七 家貧しき者は、却つてその志固し。
 - 八 敵は堅固なる城壁に據りて頑強に抵抗したれども、わが軍は忽ち之を撃破したり。
 - 九 皇軍の快速なる進撃は、何人も驚歎するところなり。
 - 一〇 わが軍紀の嚴正なるは、第三國人も之を疑はず。
- B 練習題四(一六頁)の文の構造の種類をいひ、また節を含むものは、その節の種類を述べよ。
- C 次の文に誤があつたら正し、その理由を述べよ。
- 一 かゝる盛代に生れあひたるぞ嬉しけれ。

サカ	カ	段 一 下										段											
		ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	ワ	ラ	ヤ	マ	バ			
爲	來	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	居	懲	悔	射	試	見	延	強
(爲)	(來)	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	(居)	(懲)	(悔)	(射)	(試)	(見)	(延)	(強)
し	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	い	み	み	び	ひ
し	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	い	み	み	び	ひ
する	くる	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	い	み	み	び	ひ
する	くる	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	い	み	み	び	ひ
すれ	くれ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	い	み	み	び	ひ
し	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	い	み	み	び	ひ
ろ	い	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ
サカ	カ	段 二 下										段 二 上											
		ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ダ	タ	ガ
爲	來	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	懲	悔	恨	延	強	恥	落	過
(爲)	(來)	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	懲	悔	恨	延	強	恥	落	過
せ	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ
し	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ
す	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ
する	くる	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ
すれ	くれ	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ
せ	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ

七 合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひ
 六 敵は頑強に抵抗して、容易に退却せざりし。
 五 品形こそ生れつきたらむ、心はなか賢きよりも賢きに移さば移
 四 敵は頑強に抵抗して、容易に退却せざりし。
 三 實朝は歌になむ勝れたりけり。
 二 好こそ物の上手なり。

七 合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに道にもあらぬ御計らひ
 いかげあらむ。

〔第一表〕

動詞活用表

上		段				種類							
ハ	ナ	マ	バ	ハ	タ	サ	ガ	カ	行名				
強干煮恥落案過生着	ひるるるるるるるる	蹴有乗踏飛問死打害貸騒聞	るるるむぶふぬつすすぐく	口	未然	らららまばはなたささがか	ひひにちちじぎきき	連用					
強(干)煮(煮)恥(恥)落(落)案(案)過(過)生(生)着(着)	ひ(ひ)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)	蹴(蹴)有(有)乗(乗)踏(踏)飛(飛)問(問)死(死)打(打)害(害)貸(貸)騒(騒)聞(聞)	る(る)る(る)る(る)む(む)ぶ(ぶ)ふ(ふ)ぬ(ぬ)つ(つ)す(す)す(す)ぐ(ぐ)く(く)	口	連體	る(る)る(る)る(る)む(む)ぶ(ぶ)ふ(ふ)ぬ(ぬ)つ(つ)す(す)す(す)ぐ(ぐ)く(く)	ひ(ひ)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)	終止					
	ひ(ひ)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)		る(る)る(る)る(る)む(む)ぶ(ぶ)ふ(ふ)ぬ(ぬ)つ(つ)す(す)す(す)ぐ(ぐ)く(く)	口	假定	れ(れ)れ(れ)め(め)べ(べ)へ(へ)ね(ね)て(て)せ(せ)げ(げ)け(け)	ひ(ひ)れ(れ)れ(れ)に(に)ち(ち)ち(ち)じ(じ)ぎ(ぎ)き(き)き(き)	命令					
	ひ(ひ)よ(よ)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)		れ(れ)れ(れ)め(め)べ(べ)へ(へ)ね(ね)て(て)せ(せ)げ(げ)け(け)	口	命令	れ(れ)れ(れ)め(め)べ(べ)へ(へ)ね(ね)て(て)せ(せ)げ(げ)け(け)	ひ(ひ)よ(よ)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)る(る)	命令					
段 一 上		段 下	段 四				種類						
ガ	カ	カ	ラ	ナ	マ	バ	ハ	タ	サ	ガ	カ	行名	
過生	居射見干煮着	蹴有死	有	死	乗踏飛問打貸騒聞	る	む	ぶ	ふ	つ	すす	ぐく	例語
過生	(居)(射)(見)(干)(煮)(着)	(蹴)(有)(死)	有(有)	死(死)	乗(乗)踏(踏)飛(飛)問(問)打(打)貸(貸)騒(騒)聞(聞)	る(る)	む(む)	ぶ(ぶ)	ふ(ふ)	つ(つ)	す(す)す(す)	ぐ(ぐ)く(く)	口
ぎ	み	け	ら	な	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	未然
ぎ	み	け	り	に	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き	連用
ぐ	る	ける	り	ぬ	る	む	ぶ	ふ	つ	すす	ぐ	く	終止
ぐる	る	ける	る	ぬ	る	む	ぶ	ふ	つ	すす	ぐ	く	連體
ぐれ	れ	けれ	れ	ぬ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	已然
ぎよ	よ	けよ	れ	ぬ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	命令

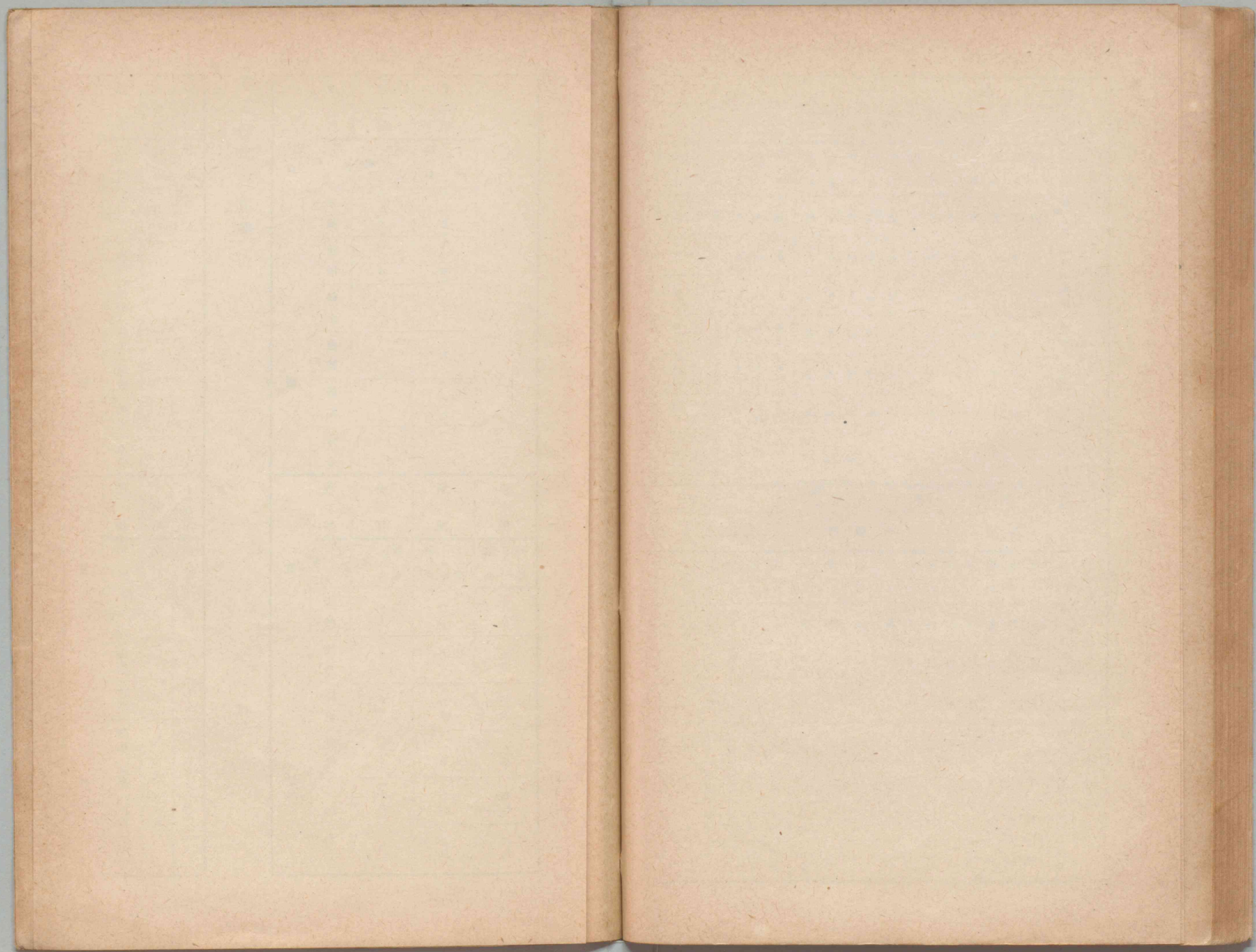
〔第一表〕
動詞活用表

サカ	段 一 下										段 一 上										段 四										種類													
	ワラヤマバハナダタザサガカア										ワラヤマバハナダタザサガカ										ラマバハナタサガカ																							
爲	來	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	居	懲	悔	射	試	見	延	強	干	煮	恥	落	案	過	生	着	蹴	有	乘	踏	飛	問	死	打	害	貸	騒	聞	
爲	來	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	居	懲	悔	射	試	見	延	強	干	煮	恥	落	案	過	生	着	蹴	有	乘	踏	飛	問	死	打	害	貸	騒	聞	
し	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	ら	ら	ま	ば	は	な	た	さ	さ	が	か	か	か		
し	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	り	り	り	み	び	ひ	ひ	に	ち	し	し	ぎ	き	き	
す	く	ゑ	る	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	る	い	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	ゐ	る	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	す	ぐ	く	く	く	く
す	く	ゑ	る	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	る	い	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	ゐ	る	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	す	ぐ	く	く	く	く
す	れ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	れ	り	い	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	れ	れ	れ	め	べ	へ	ね	て	せ	せ	げ	け	け	け
し	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	れ	れ	れ	め	べ	へ	ね	て	せ	せ	げ	け	け	け	
サカ	段 二 下										段 二 上					段 一 上					段 四										種類													
サカ	ワラヤマバハナダタザサガカア										ラヤマバハダタガカ					ワヤマハナカ					ラマバハタサガカ																							
爲	來	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	懲	悔	恨	延	強	恥	落	過	生	居	射	見	干	煮	着	蹴	有	死	乘	踏	飛	問	打	貸	騒	聞			
爲	來	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	懲	悔	恨	延	強	恥	落	過	生	居	射	見	干	煮	着	蹴	有	死	乘	踏	飛	問	打	貸	騒	聞			
せ	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	け	ら	な	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	か
し	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	け	り	に	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き	き
す	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ゐ	る	い	み	ひ	に	き	ける	り	ぬ	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	く	
す	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ゐ	る	い	み	ひ	に	き	ける	る	ぬ	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	く	
す	れ	う	れ	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う	れ	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ゐ	れ	い	み	ひ	に	き	けれ	ぬ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	け		
せ	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	ぎ	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	けれ	ぬ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	け	

語

文

語



〔第二表〕

形容詞活用表

種 類	例語		種 類	例語	
	語尾	語尾		語尾	語尾
未然	新しい	高い	未然	く	い
連用	新 ^{アタラ} し	高 ^{タカ} い	連用	い	い
終止			終止	けれ	
連體			連體		
假定			假定		
命令			命令		
種 類 <th colspan="2">例語</th> <th rowspan="2">種 類</th> <th colspan="2">例語</th>	例語		種 類	例語	
	語尾	語尾			語尾
未然	シク活用	ク活用	未然	新 ^{アタラ} し	高 ^{タカ} い
連用	新 ^{アタラ} し	高 ^{タカ} い	連用	しく	く
終止			終止	し	し
連體			連體	しき	き
假定			假定	しけれ	けれ
命令			命令		

形容詞活用表

種 類	例語		種 類	例語	
	語尾	語尾		語尾	語尾
未然	新 ^{アタラ} し	高 ^{タカ} い	未然	たら	なり
連用	新 ^{アタラ} し	高 ^{タカ} い	連用	たり	なり
終止			終止	たる	なる
連體			連體	たれ	なれ
假定			假定	たれ	なれ
命令			命令	たれ	なれ
種 類 <th colspan="2">例語</th> <th rowspan="2">種 類</th> <th colspan="2">例語</th>	例語		種 類	例語	
	語尾	語尾			語尾
未然	第一種	第二種	未然	判然	堂々
連用	新 ^{アタラ} し	高 ^{タカ} い	連用	たり	なり
終止			終止	たり	なり
連體			連體	たる	なる
假定			假定	たれ	なれ
命令			命令	たれ	なれ

比況	定指	譲	敬	望希	量	推
	です だ	ます	られる	たい	まい	よう う
	でせ だら	ませ	られ			
	でし だつ	まし	られ	たく		
	です だ	ます <small>(まする)</small>	られる	たい	まい	よう う
	(な)	ます <small>(まする)</small>	られる	たい	(まい)	(よう)
	なら	ますれ	られ	たけれ		
		ませ <small>(ませ)</small>				
	形容詞連體形	連用	受身のレル、ラレルに同じ	連用	終止(四段) 未然(右以外)	未然(四段) 未然(右以外)
ことし	たり なり	しむ	する	まほし	めり まし	む(ん)ず じ
ことく	たら なら	しめ	せ	まほしく	(ませ)	む(ん)ず じ
ことく	たり なり	しめ	せ	まほしく	(めり)	む(ん)ず じ
ことし	たり なり	(しむ)	(する)	まほし	めり まし	む(ん)ず じ
ことき	たる なる	(しむる)	(する)	まほしき	める まし	む(ん)ず じ
	たれ なれ	(しむれ)	(すれ)	まほしなれ	めれ ましか	む(ん)ず じ
	たれ なれ		られよ			
	は用言の連體又	連體	受身、使役の助動詞に同じ	連用	終止(ラ變體)	終止(ラ變體)

○口語の「ない」「たい」「らしい」は、第一種形容動詞と同じ活用をする事が出来る。

○文語の「べし」「まじ」「たし」「まほし」は、第一種形容動詞と同じ活用をする事が出来る。

〔第三表〕

助動詞活用表

望 希	量	推	了完び及去過		消 打	役 使	能 可	身 受	種 類	口
			〔了完〕	〔去過〕						
たい	まい	よう	た	た	ぬ	させる	られる	られる	語	
			たら	たら		させ	られ	られ	未然	
たく					ず	させ	られ	られ	連用	
たい	まい	よう	た	た	ぬ(ん)	させる	られる	られる	終止	
たい	(まい)	(よう)	た	た	ぬ(ん)	させる	られる	られる	連體	
たけれ			たら	たら	ね	させ	られ	られ	假定	
						させろ		られろ	命令	
連用	終止(四段) 未然(右以外)	未然(四段) 未然(右以外)	連用	連用	未然	未然(四段) 未然(右以外)	ラレルのレ、 ラレルに同じ	未然(四段) 未然(右以外)	接 續	
まほし	たし	めり	り	たり	けり	ざり	る	る	語	
まほしく	たく	(ませ)	(ら)	たら	(けら)	ざら	られ	られ	未然	
まほしく	たく	(めり)	(り)	たり		ざり	られ	られ	連用	
まほし	たし	めり	り	たり	けり	(ざり)	る	る	終止	
まほしき	たき	める	る	たる	ける	ざる	る	る	連體	
まほしまれ	たけれ	めれ	(れ)	たれ	しか	ざれ	る	る	已然	
			(れ)	(たれ)		ざれ		られよ	命令	
未然	連用	終止	連用	連用	連用	未然	未然	未然(四段) 未然(右以外)	接 續	

〔第三表〕

助動詞活用表

比況	定指	譲敬		望希	量	推		了完び及去過		消打	役使		能可	身受	種類	
		た	ら			た	ら	了完	去過		た	ら				
	です	だ	ます	たい	まい	よう	う	た	ぬ	ない	させる	せる	られる	れる	語	
	でせ	だら	ませ					たら			させ	せ	られ	れ	未然	
	でし	だつ	まし	たく			らしく		ず	なく	させ	せ	られ	れ	連用	
	です	だ	ます <small>(ます)</small>	たい	まい	よう	う	た	ぬ <small>(ん)</small>	ない	させる	せる	られる	れる	終止	
		(な)	ます <small>(ます)</small>	たい	まい <small>(まい)</small>	(よう)	(う)	た	ぬ <small>(ん)</small>	ない	させる	せる	られる	れる	連體	
		なら	ますれ	たけれ				たら	ね	なけれ	させ	せれ	られ	れ	假定	
			ませ <small>(まし)</small>								させろ	せよ	られろ	れよ	命令	
	形容詞連體形	體言、助詞ノ	連用	連用	終止(四段) 未然(右以外)	終止(四段) 未然(右以外)	終止(四段) 未然(右以外)	連用	未然	未然	未然(右以外)	未然(四段)	ラレルに同じ	ラレルに同じ	接續	
ことし	たり	なり	しむ	さす	す	らる	まほし	たし	めり	まし	じ	まじ	べし	む <small>(ん)</small> ず	らし	語
ことく	たら	なら	しめ	させ	せ	られ	まほしく	たく	(ませ)		まじく	まじく	べく	む <small>(ん)</small>	れ	未然
ことく	たり	なり	しめ	させ	せ	られ	まほしく	たく	(めり)		まじく	まじく	べく	む <small>(ん)</small>	れ	連用
ことし	たり	なり	(しむ)	(さす)	(す)	らる	まほし	たし	めり	まし	じ	まじ	べし	む <small>(ん)</small> ず	らし	終止
ことき	たる	なる	(しむる)	(さする)	(する)	らるる	まほしき	たき	める	まし	(じ)	まじき	べき	む <small>(ん)</small>	る	連體
	たれ	なれ	(しむれ)	(さすれ)	(すれ)	られ	まほしまれ	たけれ	めれ	ましか	(じ)	まじけれ	べけれ	む <small>(ん)</small>	るれ	已然
	たれ	なれ				られよ								む <small>(ん)</small>	れよ	命令
は	用言の連體又	體言、用言の				ラレルに同じ	連用	連用	終止(ラ變は)	終止(ラ變は)	終止(ラ變は)	終止(ラ變は)	終止(ラ變は)	終止(ラ變は)	終止(ラ變は)	接續

○口語の「ない」「たい」「らしい」は、第一種形容動詞と同じ活用をする事が出来る。

○文語の「べし」「まじ」「たし」「まほし」は、第一種形容動詞と同じ活用をする事が出来る。

（本體）

〔第四表〕

口語助動詞接續表

動		詞		に	
未然形に	連用形に	終止形に	連體形に	已然形に	動詞以外に
(身受) られる (四段ナ變ラ變 右以外に)					形容詞終止形に 體言又は助詞ノに
未 然 形 に れる (四段に) られる (四段以外に)	連 用 形 に せる (四段に) させる (四段以外に) (サ變は「させる」とも)	終 止 形 に た (サ行以外の四 段は音便形に)	連 體 形 に らしい (四段に)	已 然 形 に ます (定指)	動 詞 以 外 に だ (定指)
(消打) ぬ (ん)(サ變は「せしに」)	(役使) ぬ (ん)(サ變は「せしに」)	(及去過 了完び)			
(能可) られる (四段に) られる (四段以外に) (サ變は「される」とも)	(量推) られる (四段に) られる (四段以外に) (サ變は「される」とも)		(量推) らしい (四段に)		
(讓敬) られる (四段に) られる (四段以外に)	(望希) たがる		(量推) らしい (四段に)		

○指定の「だら(ウ)」「なら」「てせ(ウ)」は動詞の終止形にも連る。

文語助動詞接續表

動		詞		に	
未然形に	連用形に	終止形に	連體形に	已然形に	動詞以外に
(身受) られる (四段ナ變ラ變 右以外に)					形容詞終止形に 體言又は助詞ノに
未 然 形 に れる (四段に) られる (四段以外に)	連 用 形 に せる (四段に) させる (四段以外に) (サ變は「させる」とも)	終 止 形 に た (サ行以外の四 段は音便形に)	連 體 形 に らしい (四段に)	已 然 形 に ます (定指)	動 詞 以 外 に だ (定指)

		(第一種) がのをにへとよりにて	體 言 に
(第三種) な一そ(カ變サ變 に) ばや なむ(なん)	(第二種) は て		用 未 然 形 に
(第三種) な一そ(カ變サ變 以外に)	(第二種) て(音便形にも) つり とも(形容詞に)		
(第三種) な(ラ變以外に) や	(第二種) とも(動詞に)		終 止 形 に
(第三種) な(ラ變に) かな(形容詞は音 便形にも) よぞか	(第二種) が に を	(第一種) がのをにへとよりにて	連 體 形 に
	(第二種) は ど ども		已 然 形 に

昭和十三年十二月六日 印刷
 昭和十三年十二月九日 發行
 昭和十四年一月十七日 訂正再版印刷
 昭和十四年一月二十日 訂正再版發行

改新文典 女子上級用
 定價金六十錢



著者

橋本進吉

發行者

東京市神田區神保町一丁目三番地
 會社 富山房

代表者

同所 富山房社長
 坂本守正

印刷所

東京市京橋區木挽町三丁目十一番地
 新井電新堂

發行所

東京市神田區神保町一丁目三番地
 會社 富山房

電話神田二一七一—八
 振替口座東京五〇一番

